

2 . 教育学研究科

教育学研究科の教育目的と特徴	2 - 2
分析項目ごとの水準の判断	2 - 3
分析項目 教育の実施体制	2 - 3
分析項目 教育内容	2 - 11
分析項目 教育方法	2 - 19
分析項目 学業の成果	2 - 27
分析項目 進路・就職の状況	2 - 30
質の向上度の判断	2 - 34
別添資料	2 - 36

教育学研究科の教育目的と特徴

1. 教育目的

(1) 教育活動を実施する上での基本方針

21世紀の知識基盤社会に生きる力を育てる学校の実現は、教師の専門職としての実践的力量形成に懸かっている。福井大学大学院教育学研究科は、そうした21世紀の学校を実現する教師の実践力形成を教育目的としている。

(2) 達成しようとする基本的な成果

学校改革に資する教師の力量形成のためのカリキュラム開発と充実を図る。

実践的科目を軸に専門科目を配置したカリキュラムの充実を図る。

カリキュラムの改善に資するために、学校を含む地域の専門機関、およびNPO等の市民組織との共同研究とネットワーク化を図る。

国内外の大学等とのネットワークを構築するとともに、国際貢献も重要な課題に据え、留学生等の積極的な受入れを進める。

生涯にわたる学習と教育機関としての役割を明確化する。

地域文化課程・地域社会課程からの進学者や、社会人の入学者等多様な学生を受け入れるためのカリキュラムの改善に努める。

大学院教育と学部教育の連続性と関連性を高めたカリキュラム開発と改善に努める。

大学院教育の充実のために、学校教員はじめ地域の専門家との間で行われる大学院生の参加を伴う共同研究をより一層充実、拡大する。

(3) 大学の基本的な目標との関連

中期目標における「人々が健やかに暮らせるための学術文化や科学・技術に関する高度な教育を実施する」こと及び「地域や国際社会にも貢献し得る人材を育成する」という大学の基本的な目標に関連する。

(4) 教育研究等の質の向上に関する目標との関連

中期目標における「高い倫理観に裏打ちされた高い教養と豊かな人間性をもち高度な専門的知識を備えた創造力のある人材の育成」及び「学部における基礎的知識及び実社会における実践的能力等の基盤の上に高度の専門的知識とともに優れた研究能力を備え、地域はもとより広く国際的な活動に貢献できる高い教育的資質を持つ人材」を育成するという「教育研究等の質の向上に関する目標」に関連する。

2. 組織の特徴や特色

平成4年に設置された大学院教育学研究科は、「教育における理論と実践の総合化」をめざし、学校における教育実践に密接に結び付いた教育実践研究と教科教育学を柱とする新しい大学院として構想された。教育学・心理学・教科教育学の研究者が協働して進める必修科目「教育実践研究」は、その特色を示している。

平成13年度からは、現職教育の充実を目的とする新しい大学院コースの取組を進めている。一つは「夜間主コース」であり、もう一つは「夜間主・学校改革実践研究コース」である。とりわけ夜間主・学校改革実践研究コースは、学校が直面する課題の解決と改革推進のために、学校拠点での実践研究と大学院での現職教育の融合をめざすシステムであり、学校改革のための実践研究を組織的長期的に進めていくことを中心に据えている。

こうした取組を踏まえ、平成20年度から21世紀の知識基盤社会に生きる力を育てる学校を実現する教師の専門的力量を開発するために、「理論と実践の融合」をさらに推し進めた教職大学院「教職開発専攻」を設置した。同時に既存の教育学研究科においても協働実践研究プロジェクトを核とする教育課程改革を行った。

3. 入学者の状況

入学者数（括弧内は志願者数）は平成16年度42名（47名）、17年度51名（57名）、18年度46名（57名）、19年度49名（61名）という状況である。内訳は、平成19年の場合、

昼間コースが40名、夜間主コースが10名である。全入学者の過半は学部新卒者が占めるが、夜間主コースを中心に、小中高等学校教員、専門学校教員、適応指導教室の教員、医師、保育士等、多様な分野の専門職に就いている者も数多く入学している。学校改革実践研究コースには拠点校から教員が継続して入学し、地域における教育実践研究の拠点としての機能を果たしている。

〔想定する関係者とその期待〕

- ・地域や国際社会：専門的・実践的力量を備えた教員の養成とそれに応える大学院の教育内容・教育方法の改善を求める強い期待がある。また、現職教員の再教育の場として、大学院修士課程を活用した多様な学習機会の保障（働きながら学べる夜間の大学院、長期履修制度、教員免許取得プログラムや大学院免許法認定公開講座などの多様な履修形態）の期待もある。
- ・学校関係者：大学院での学修が、勤務校での授業・カリキュラム・生徒指導等を通しての学校改革に役立って欲しいとの期待、また、学校現場との連携関係を確立させて欲しいとの期待がある。
- ・大学院生・修了生：ストレートマスターからは、インターンシップなどを利用した学校での十分な実践経験、修了生からは、修了後の大学院・公開研究会等での学習などへの期待がある。

分析項目ごとの水準の判断

分析項目 教育の実施体制

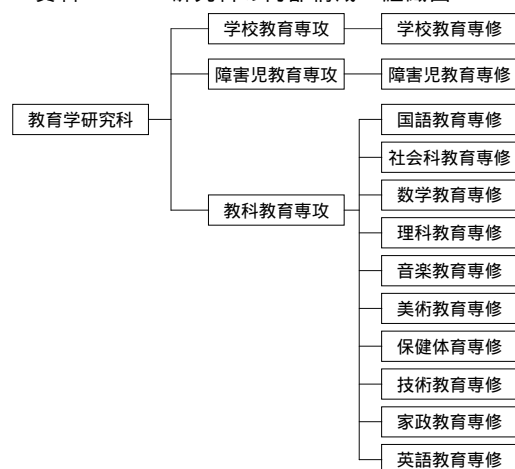
(1) 観点ごとの分析

観点 1-1 基本的組織の編成

(観点到に係る状況)

教育学研究科は、学校教育専攻・障害児教育専攻・教科教育専攻の3専攻から構成され、教科教育専攻には各教科に対応した専修を設けている【資料1-1-1】。各専攻には多くの現職教員等が在職のまま学ぶことができる夜間主コースを設けるとともに、学校教育専攻には夜間主・学校改革実践研究コースを設置している【資料1-1-2：P4】。

資料 1-1-1 研究科の内部構成・組織図



(大学院履修手引き)

資料 1-1-2 夜間主コース，教育方法の特例，長期履修学生に関する規程

<p>福井大学大学院教育学研究科規程(抜粋)</p> <p>(夜間主および夜間主・学校改革実践研究コース) 第2条の2 各専修に夜間主コースを，学校教育専修及び障害児教育専修に夜間主・学校改革実践研究コースを置く。</p> <p>(教育方法の特例) 第6条 教育研究科における授業及び研究指導は教育学研究科委員会が教育上特別の必要があると認める場合は，夜間その他特定の時間又は時期において行うことができる。 2 教育職員等の社会人である学生で，前項に規定する教育方法の特例による授業又は研究指導を受けようとする者は書面をもってその旨教育学研究科長に願い出て，その許可を受けなければならない。ただし，夜間主コース及び夜間主・学校改革実践コースの学生についてはこの限りでない。</p> <p>(長期履修生学生) 第6条の2 学生が，職業を有している等の事情により，標準修業年限を超えて一定の期間にわたり計画的に教育課程を履修することを申し出たときは，教育学研究科委員会の議を経て，長期履修学生としてその計画的な履修を求めることができる。</p>
--

(福井大学大学院教育学研究科規程)

教員組織は各専攻(専修)の教育目的を達成するために専任教員を適切に配置するとともに，大学院教育を充実させるために学外兼務教員を必要に応じて配置している【資料 1-1-3】。

資料 1-1-3 教育学研究科担当教員数

専攻名	平成16年4月1日		平成17年4月1日		平成18年4月1日		平成19年4月1日		
	研究指導 教員数	研究指導 補助教員数	研究指導 教員数	研究指導 補助教員数	研究指導 教員数	研究指導 補助教員数	研究指導 教員数	研究指導 補助教員数	
学校教育専修	12		11		10		7		
障害児教育専修	5		3		3	1	4	1	
教科教育専攻	国語教育専修	6	1 (2)	6	1 (3)	6	1 (3)	6	1 (3)
	社会科教育専修	11	3	10	4	13	2	13	3
	数学教育専修	5	2	6	2	5	2	3	1
	理科教育専修	9	2	8	2	8	2	8	2
	音楽教育専修	5	2	5	1	5	1	5	2
	美術教育専修	7		6		5	1	4	2
	保健体育専修	5	3	5	3	5	3	4	3
	技術教育専修	4	2	3	1	3	1	3	1
	家政教育専修	6	1	5		5		5	1
	英語教育専修	6	5	6	5	8	1	8	2
小計	81	21 (2)	74	19 (3)	76	15 (3)	70	19 (3)	
合計	102 (2)		93 (3)		91 (3)		89 (3)		

()は兼任教員で外教

(外部評価のための資料「福井大学教育地域科学部・大学院教育学研究科の現状」，平成19年，以後「外部評価のための資料」と表記)

学部長を委員長とした学部・研究科企画委員会において，教育目的の達成のための教員組織の在り方を検討し，平成20年度の教職大学院設置及び既存研究科の改組も考慮した適切な人事計画を立てている【資料 1-1-4：P5，別添資料 1-1：P36，別添資料 2-1：P38，別添資料 2-2：P39】。

資料 1-1-4 学部・研究科企画委員会要項

福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会要項	
	平成17年4月5日 教授会決定
	(設置)
第1条	教育地域科学部及び大学院教育学研究科に、福井大学教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会(以下「委員会」という。)を置く。
	(目的)
第2条	委員会は、学部及び研究科の企画・運営に関し、次の各号に掲げる事項を審議する。
	(1) 大学及び学部の中期目標・中期計画及び年度計画の検討及びその運営方針に関する事項
	(2) 学部及び研究科の将来構想の検討及びその運営方針に関する事項
	(3) 学部の施設利用に関する事項
	(4) その他学部及び大学院の企画・運営の基本に関する事項
	(組織)
第3条	委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。
	(1) 学部長
	(2) 学部選出の評議員 3名
	(3) 附属教育実践総合センター長
	(4) 教員定員・組織及び人事制度に関する委員会委員長
	(5) 教育地域科学部教務学生委員会委員長
	(6) 教授会選出の教員 4名
	(7) 前各号に掲げる者以外の教育地域科学部の教員 若干名 2 前項第7号の委員は、学部長が指名する。
	(任期)
第4条	前条第1項第6号及び第7号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。 2 委員に欠員が生じた場合の補欠委員の任期は前任者の残任期間とする。
	(委員長)
第5条	委員会に委員長を置く。 2 委員長は、学部長をもって充てる。
	(会議)
第6条	委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
	(委員以外の者の出席)
第7条	委員会が必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、意見を聴くことができる。
	(専門委員会)
第8条	委員会は、必要に応じ、専門委員会を置くことができる。 2 専門委員会について必要な事項は、委員会が定める。
	(庶務)
第9条	委員会の庶務は、教育地域科学部支援室において処理する。

(教育学研究科内規集)

教員採用に関しては、公募制を基本として十分な教育研究業績をもつ優秀な人材を確保するとともに、実践的教員養成を目指す大学院の教育目的に適う実務家教員の採用も進めている(平成17年度1名、平成19年度6名採用)【資料1-1-5】。

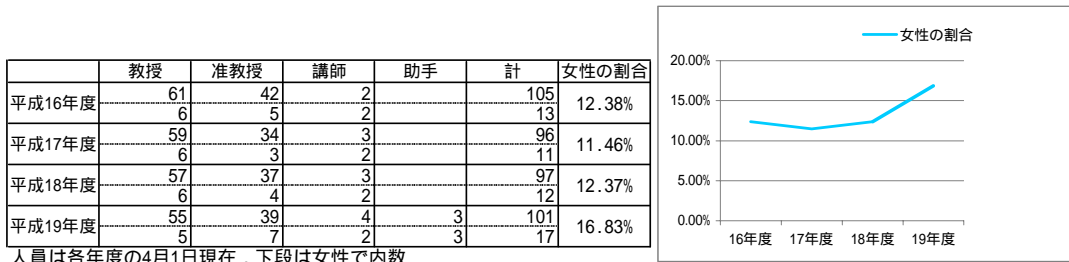
資料 1-1-5 実務家教員公募要項例

数学科教育担当教員(実務家)公募要項	
1.採用職名・人員	助教授 1名
2.教育研究分野	数学科教育をベースにした教育実践研究
3.担当科目等	(1) 大学院:「数学教育特論」,「数学科教育研究」等 (2) 学部:「算数教材研究」,「数学科教育法」等 (3) 共通教育:数学又は数学科教育に関する一般教育的科目 (4) 教職大学院:専門科目を兼任で担当することもある。 「カリキュラムデザインの実践事例研究」,「授業づくりの長期実践事例研究」等を他の教員と共同で担当する。
4.応募資格	採用予定日現在で以下の項目を満たす者 (1) 数学科教育の実績があり、5年以上の実務経験がある現職教諭等で、以下の要件を満たす者 ・実務を離れている場合は、実務を離れて5年以内の者 ・学校以外での教育実践の共同研究を組織あるいは支援した経験のある者(研究主任・教務主任等を経験している者)、もしくは教育実践の共同研究に強い関心のある者 (2) 大学院修士課程修了者、またはこれと同等以上の学力を有する者 (3) 採用後、福井市またはその近郊に居住可能であること

(平成19年度教員募集要項より抜粋)

男女共同参画を実現する取組と関わり、女性教員の比率を高め、平成 20 年 2 月 1 日現在では約 19%にまでなっている【資料 1-1-6】。

資料 1-1-6 女性教員の割合



人員は各年度の4月1日現在、下段は女性で内数

(基礎資料)

入学者数は定員 67 名に対して、平成 16 年度 42 名、17 年度 51 名、18 年度 46 名、19 年度 50 名という状況である【資料 1-1-7】。その内約 2 割は夜間主コース入学者であり、現職教員を始めとする社会人が修学している【資料 1-1-8】。

資料 1-1-7 教育学研究科学生定員と現員

専攻・専修	入学定員	平成16年度現員		平成17年度現員		平成18年度現員		平成19年度現員		
		1年	2年	1年	2年	1年	2年	1年	2年	
学校教育専攻・学校教育専修	16	14	10	20	15	9(1)	21	19(1)	9(1)	
障害児教育専攻・障害児教育専修	8	6	7	3(2)	5	10(1)	3(2)	5(1)	12(3)	
教科教育専攻	43	国語科教育専修	3	7	5	2	2	4	6	2
		社会科教育専修	5	4	0	5	1	0	3	1
		数学教育専修	1	2	1	1	4(1)	1	1(1)	4(1)
		理科教育専修	2	0	4	2	3	4	3	3
		音楽教育専修	2	4(1)	3	2	0	3	1	0
		美術教育専修	0	6(2)	4	3(2)	2	4	1	2
		保健体育専修	4	2	2	4	5	2	1	5
		技術教育専修	2	6	6	3	5	6	5	5
		家政教育専修	1	0	1	1	0	1	2	0
		英語教育専修	2	5	2	4	5	3	3(2)	5
計	67	42	53(3)	51(2)	47(2)	46(3)	52(2)	50(5)	48(5)	

()内は、長期履修生を示す。内数。

(外部評価のための資料、平成 19 年)

資料 1-1-8 夜間主コース入学者数

専修・コース	入学年度			
	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
学校教育専修・夜間主コース				3
学校教育専修・学校改革実践コース	7	9	4	6
障害児教育専修・夜間主コース	3	3	2	1
美術教育専修・夜間主コース		1	1	
英語教育専修・夜間主コース			1	
計	10	13	8	10
夜間主コース入学者の割合	23.8%	25.5%	19.0%	20.0%

(基礎資料)

観点 1-2 教育内容、教育方法の改善に取り組む体制

(観点到に係る状況)

教育内容・方法の改善のために、平成 14 年に学部 F D 委員会が組織され、全教員を対象とした「F D 研究会」を毎年開催してきた。F D 研究会では、各専修・コースの授業

の取組についての報告をもとに、領域を越えたメンバーで検討する授業実践記録検討会を重ね、研究科の教育内容・教育方法の検討と改善を進めてきた。平成17年度以降は他学部（工学部、医学部）FD委員会と共催で研究会を開催するなど、全学的な視点で効果的なFD活動を押し進めてきた【資料1-2-1、資料1-2-2：P8】。これは他大学にも類例をみない制度となっている。教員のFD活動状況及び授業改善の状況は教員評価にも反映されている【資料1-2-3：P8】。

資料1-2-1 FD活動状況と報告書

第4回（平成17年度）「FDの課題と授業改善の工夫」 教育地域科学部FD委員会主催

日時 平成18年3月7日(火) 午後1時から

第1部 講演会 講師 京都大学高等教育研究開発推進センター教授 松下佳代氏
演題 「FDでいま何が課題なのか？」

第2部 講座別分科会(15時10分～16時40分)

第1分科会(11講) 言語教育&地域環境&行政社会
司会：保科英人 報告：松友一雄/高田洋子 記録：井上博行

第2分科会(12講) 理数教育&異文化交流
司会：木原泰紀 報告：中田隆二/林捷 記録：皆島 博

第3分科会 芸術・保健体育教育&生涯学習
司会：柳澤昌一 報告：吉澤正尹/渋谷政子 記録：岡田裕成

第4分科会 生活科学教育&社会系教育&発達科学・センター
司会：門井直哉 報告：寺尾健夫/熊谷高幸 記録：竹内恵子

**第5回（平成18年度）全学FDフォーラム 大学教育を直視し、自分の授業を省察する
教育地域科学部FD委員・工学部FD委員会・医学部看護学科FD委員会 共催**

日程 2007年3月6日(火) 13時～16時30分
場所 <文京キャンパス>教育地域科学部1号館
部・部 大2講義室、部11 16講義室、22 演習室

挨拶 児嶋眞平 学長

部 3学部・学科のFD活動紹介
各FD委員会：野嶋慎二(工)・出口洋二(医・看護)・森透(教)

部 講演会 13時30分～14時45分(講演1時間、質疑15分)
「知の担い手としての学生を育てる大学教育
新しい時代を力強く生き抜くリテラシーの育成」
溝上 慎一 氏 (京都大学高等教育研究開発推進センター助教授)

部 分科会(大学での授業実践を語る)15時～16時30分

第1分科会 (11講義室・1階)
報告者 三好修一郎(教：言語教育講座)「教職総合演習」
野嶋 慎二(工：建築建設工学専攻)「都市計画系設計演習」
司会者 前田 樹夫(FD委員・教・理数教育講座)
記録者 松下 洸(FD委員・工・機械工学専攻)

第2分科会 (12講義室・1階)
報告者 時田 武(教：理数教育講座)「微分積分学」
月原 敏博(教：地域環境講座)「地域研究概論」
司会者 堀邊 稔(FD委員・工・物理工学専攻)
記録者 伊藤 勇(教・行政社会講座)

第3分科会 (13講義室・1階)
報告者 池内 慈朗(教：芸術・保健体育教育講座)「低学年図画工作」
寺田 聡(工：生物応用化学専攻)「化学3(読書教育)」
司会者 塚本 充(FD委員・教・生活科学教育講座)
記録者 宮崎 光二(教・芸術・保健体育教育講座)

第4分科会 (14講義室・1階)
報告者 坂田 登(教：社会系教育講座)「西洋思想の形成」
徳永 雄次(工：材料開発工学専攻)
「日本海地域の自然と環境」「有機化学」
司会者 高田 洋子(FD委員・教・行政社会講座)
記録者 片山 正純(FD委員・工・知能システム工学専攻)

第5分科会 (15講義室・1階)
報告者 石井パークマン麻子(教：発達科学講座)「スウェーデンの障害児教育」
司会者 熊谷 高幸(FD委員・教・発達科学講座)
記録者 三上 肇(FD委員・教・生涯学習講座)

第6分科会 (16講義室・1階)
報告者 岡田 裕成(教：生涯学習講座)「美術理解の視点」「芸術学」
吉田 伸治(工：ファイバー・アムニティ工学)
「建築環境工学第一」・「実際実験・実習」
司会者 松田 和之(FD委員・教・異文化交流講座)

(外部評価のための資料，平成19年)

資料 1-2-2 F D 研究会参加者のコメント

招待講演者 溝上慎一氏（京都大学高等教育研究開発推進センター）のコメント
 全学 F D フォーラム分科会について
 福井大学には、教育地域科学部、医学部、工学部の 3 学部があるが、私が聞いた限りでは、こうした学部を越えての全学 F D フォーラムははじめてのことである。学部を越えるという部分の配慮からか、所属する教員の専門性が少しでもわかるようにするための配慮からか、分科会報告者の所属には学部名が書かれておらず、講座や学科のみが書かれていた。この点は印象深かった。直接拝聴できた分科会は第 1 分科会だけなので、他の発表は資料をざっと見ただけであるが、概ね「（自身の）授業実践を語る」という分科会テーマは「学生をどのように育てようとしているか」「学生のどの部分をもっと育てなければならないか」というように翻訳されて報告されていたようである。1 分科会の中に異なる学部の授業実践が 2 つ並べて報告されているが、あまり専門特化した知識内容にこだわりすぎず（まったくないというのも不可能であるが）、学生をどのように育てるかという観点から報告するならば、学部を越えて議論を共有することができる。事前に十分に考えられて企画された分科会であったとつくづく感心した次第である。（平成 18 年度全学 F D フォーラム報告書 P 34 より抜粋）

F D フォーラム参加者のコメント
 学生に考えさせるについて
 報告や資料から I 先生の授業のねらいは「学生が考える」ことに力点が置かれている。これは当たり前前の命題ではあるが、実はそんなに簡単なことではないと感じているのは私だけではない。参加者からも「学生に考えさせるのは難しい」という感想も述べられていたが、私たちは学生が考えるような授業をしているのだろうか？専門知識の一方的な伝達に終止してはいないだろうか？それ以前に自分たちの専門分野で学生に「何を」「どのように」考えるのかを伝えているのだろうか？学生に考えさせる、この点だけでもディスカッションできれば良かったと後で思った。I 先生の授業は誰にでも起こりうるが普段は自己の問題として捉えにくい「障害」をテーマとして、簡単な体験、生の事例紹介、現場の教師の授業参加、小グループでのディスカッションと色々な方策によって学生を揺さぶり、インパクトを与えることで否応なく考えざるを得ない状況を作っている。これについては資料に受講生の評価や感想が載っているのでぜひ目を通していただきたい。私はときおり記録するのも忘れて、改めて「学生に考えさせる」について考えさせられ、分科会後でも頭の片隅に残ったままである。これだけでも今回の分科会は私にとっては有意義であった。（平成 18 年度全学 F D フォーラム報告書 P 114 より抜粋）

（平成 18 年度全学 F D フォーラム報告書）

資料 1-2-3 教育活動評価基準

<p>A 「授業の実施状況」(0～10点) 【基本】・・・シラバスへの記載、15回の授業実施、成績評価書の期限内提出がなされた場合は基本点=8、という考え方を基にし、それに加点・減点を行う。 (なお、15回の授業実施の内には試験の1回を含むものとする。)</p> <p>基本点 1 授業ごと(以下も基本的に同じ)に、休講回数・補講回数が2以上であれば減点1とする。 シラバスへの記載がなされていなければ、減点1とする。 成績評価表が出されていなければ減点1とする。 担当授業コマ数(学部、大学院を含む)については、実コマ数が年間を通じて8コマを下回る場合は減点1とする。 キャンパス間協力での授業担当を行ってれば、加点1とする。 中期計画・中期目標から抽出される授業実施関連での教育目標に大きな貢献があったと認められる場合は、加点1とすることができる。(「特記事項・その他」の欄に記載すること。)</p> <p>卒論生又は、修論生が1名以上いる場合には、それぞれについて加点1とする。 留学生(学部・大学院研究生「教員研修留学生を含む」)、日研究生、特別研究生、短期留学プログラム学生)が1名以上いる場合は、加点1とする。 授業科目名と授業内容に不一致があると認められる場合には、総合評価で相応の減点を行うことがある。</p> <p>「授業の実施状況」の合計点</p>	<p>C 「FDその他の教育活動」(0～5点) 【基本】・・・年間に一度以上FD関係の研修会に出席し、オフィスアワーを設定してれば普通=3、という考え方を基にし、その上に乗って加点・減点とする。</p> <p>基本点 年間に一度もFD関係の研修会に出席していないものは減点1とする。 助言学生がいて、助言学生との懇談会を開催してれば加点1とする。 研修会(FD)での報告者(報告書作成が前提されている)は加点2とする。 学部及び大学院の入試試験問題作成・採点・面接委員はいずれかを担当してれば加点1とする。 次に掲げる教育活動に関する委員会で、最も活動実績があったと認められる委員会一つについてのみ加点1とする。(共通教育委員会、カリキュラム委員会、学部FD委員会、学校教育課程委員会、地域文化課程・地域社会課程委員会、教育実践研究実施委員会、介護体験実施委員会、学部就職委員会) 学部就職委員会委員以外の者で、学生の就職相談等に関し、特に活発な活動であると認められる場合には加点1とする。 顧問など課外活動での学生指導に見るべき貢献があれば加点1とすることができる。 実習、インターンシップ等にかかわる学外機関との協議・折衝を担当した場合には加点1とすることができる。(「特記事項・その他」の欄に記載すること。)</p> <p>自主学習への配慮、基礎学力不足学生への配慮等から、特別な取組を行っている場合には、加点1とすることができる(例えば自主ゼミ等の活動の促進、補習授業の開催等)。(「特記事項・その他」の欄に記載すること。)</p> <p>中期計画・中期目標から抽出される授業実施関連以外の教育目標に大きな貢献があったと認められる場合は、加点1とすることができる。(自己申告は「特記事項・その他」の欄に記載すること。)</p> <p>「FDその他の教育活動」の合計点</p>
<p>B 「授業の工夫・改善等」(0～5点)</p> <p>授業(共同授業を含む)の工夫・改善について、記述があれば2点とする。</p> <p>次の事項について該当する事項があれば、加点する。加点3、2、1、0の4段階に分ける。 ア-1. 授業の内容・負担(学生にとっての)・雰囲気の工夫・改善 ア-2. 授業の進め方の工夫・改善 ア-3. 成績評価方法の工夫・改善 イ. 授業目的の達成度からみた成果・効果 ウ. 学生の意見のフィードバック(ないし学生評価) エ. 他の教員の参考となる取組 上記観点に照らして何れか1つでも特に評価できるものを、加点3とする。 加点2、1のものは、加点3のものと同対比較において決める。) 課程・コース・サブコース単位の活動としてのカリキュラムの工夫・改善について、カリキュラム上の改善に資する貢献が認められた場合には、関係した各人を加点1とすることができる。</p> <p>「授業の工夫・改善等」の合計点</p>	<p>平成 18 年 4 月 21 日、学部及び研究科教員個人評価指針が教授会にて了承される。 平成 19 年 9 月から教員個人評価が本格実施に入る。</p>

(平成19年度教員評価資料)

教育学研究科では「教材開発研究会セミナー」の定期開催(平成18年度13回,平成19年度16回)とワークショップ・シンポジウム(平成18年7月,平成19年2月,平成20年2月)の開催を行い,FD委員会の取組以外にも適切な研修機会を設けている。これらの取組は,研究科教員の共同研究を生み出すなどの成果に結びついている【資料1-2-4】。

資料1-2-4 教材開発研究会活動状況

教材開発研究会セミナー

平成18年度

- 第1回 教材開発と海外での教育支援実践～大津波の被災地、インドネシア・バンドアチェ市での「物理教育ワークショップ」(福井大学・シャクハラ大学共催)の報告会を兼ねて～ 香川 喜一郎(理科教育専修)
- 第2回 地図で読み解く日本と世界 門井 直哉(社会科教育専修)
- 第3回 スウェーデンにおける現職教員教育の経験から 石井パークマン麻子(障害児教育専修)
- 第4回 化学を生かした地域・学校・大学連携プログラム 浅原 雅浩(理科教育専修)
- 第5回 米国プロジェクト・ゼロによる教育改革への挑戦・ハワード・ガードナーのMI理論(多元的知能理論)を中心として・池内 慈朗(美術教育専修)
- 第6回 IMP-数学相互学習の紹介 佐分利 豊(数学教育専修)
- 第7回 ベルギーにおける高等美術教育の動向
-学芸員養成コース(BMW/PCAプロジェクト)の紹介- 湊 七雄(美術教育専修)
- 第8回 統計教育のいろいろ-福井大学から出前をした授業- 山口 光代(数学教育専修)

平成19年度

- 第1回「リアルタイム教育モニタリング」 香川 喜一郎(理科教育専修)
- 第2回「ものづくり教育関連教材・教具について」 奥野 信一(技術教育専修)
- 第3回「音楽と数学」-【実験数学】によるカリキュラム開発の一事例- 伊禮 三之(数学教育専修)
- 第4回 批判的思考力を育てるカリキュラムと授業
-アメリカの家庭科教育の事例に学ぶ- ジャネット・ラスター(オハイオ州立大学)
- 第5回「ポロニヤ・プロセスの高等教育制度改革と歴史教育の現在」
東欧諸国におけるホロコースト教育の事例に学ぶ 中澤 達哉(社会科教育専修)
- 第6回「教職大学院担当の教員になって」-児童生徒に夢の卵を持たせたい- 長谷川 義治(学校教育専修)
(資料追加予定)

ワークショップ「教科専門の技」 平成18年7月29日

- (1)身近な教材を用い、楽しくかつ、論理的思考を重視する物理実験 香川 喜一郎(理科教育専修)
- (2)フェルト針を用いた被服製作と授業実践雄の可能性 服部由美子(家政教育専修)
- (3)カラートークの原理と開発 上田正紘(技術教育専修)
- (4)計算だけが数学ではない-無理数をもみる- 黒木哲徳(数学教育専修)
- (5)地誌的素材と蓄積・活用法の新組織化 月原博敏,門井直哉(社会科教育専修)
- (6)英語の複合語と句:コンパースと学習辞典を使って 中根貞幸(英語教育専修)
- (7)『身体運動の成り立ち』から学習指導を考える 吉澤正尹(保健体育専修)

シンポジウム 教材から考える学力形成-豊かな学びを求めて- 平成19年2月17日

今、本当に学力か?～教育現場から見た不易と流行～ 灯明寺中学校 南部 隆幸
2学期制導入と学びの継続 福井市教育長 渡辺 本爾

ものづくりから社会の仕組みを学んでGPへ-現代的教育ニーズ取組支援プログラム- 大阪教育大学 關隆晴・碓田智子

ワークショップ・シンポジウム 子どもの思考力をのばす 平成20年2月16日

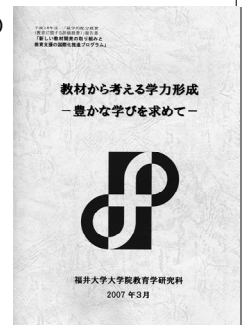
講演 数学的な「読み書き能力」を身につける授業 新井紀子(国立情報学研究所)
論理性を身につけるために～私の実践から～ 高間春彦(福井市立進明中学校)
組織を見直す視点-スウェーデンにおける教師教育の経験から- 石井パークマン麻子(教育地域科学部発達科学講座)

ワークショップ

- (1)折り紙によるユニット多面体-正多面体とオイラー・デカルトの定理- 伊禮三之(数学教育専修)
- (2)微小ビーズ球を用いる摩擦のない力学演示実験 香川喜一郎・石井恭子(理科教育専修)
- (3)フェルト小物の製作-羊毛線維から生活に役立つ物を考える 服部由美子・塚倉知実(家政教育専修)
- (4)小中学生向け建築・都市計画教育法 葉袋奈美子(工学研究科建築建設工学専攻)
- (5)健康・環境にやさしい版画技法 湊七雄(美術教育専修)

研究論文

石井パークマン麻子・湊七雄・中澤達哉「EU諸国のポロニヤ・プロセス と複合文化社会における教員養成課程改革(1)」(福井大学教育地域科学部紀要_教育科学), 63, 2007



(外部評価のための資料，平成 19 年)

教師教育改革のための公開研究会（学校改革実践研究福井ラウンドテーブル/日本の教師教育のための福井会議）を組織し、全国の教師教育の研究者や実践者の参加を得て、学部・研究科の授業と実践についての報告と検討を行い、そこでの評価をふまえて教育内容・方法の改善を重ねている【資料 1-2-5】。その成果は、教職大学院の構想や、既存の教科教育専攻のカリキュラム開発協働研究プロジェクトを核とする教育内容・方法の改善に具体化されてきている【別添資料 2-1：P38，別添資料 2-2：P39】。

資料 1-2-5 日本における教師教育改革のための福井会議

日本の教師教育改革のための福井会議 2007 報告書

教職大学院のカリキュラム：デザインと組織

2007.3

3/3(sat)
13:30-18:40

教職大学院のカリキュラム：デザインと組織
日本の教師教育改革のための福井会議 2007

シンポジウム
教職大学院のカリキュラム：構想と実践
session I 13:40-15:20
福井大学総合研究棟 I 13 階 会議室

渡邊 清 (兵庫教育大学) 無藤 隆 (福井大学)

松本 健一 (福井大学) 新田 正樹 (文部科学省高等教育局)

特別報告
アメリカにおける数学教育改革と教師教育の課題
Session II 15:30-16:00

Dan Fendel
Director, Interactive mathematics Program
Professor (emerita), San Francisco State University

ワークショップ
教職専門性形成のためのカリキュラム・マネジメント
Session III 16:10-17:30

福井大学教育地域科学部 第 1 号館 第 11/13 講義室
小グループに分かれて教職大学院、大学院・学部における教職専門性研究のためのカリキュラム・デザイン、カリキュラム・マネジメントに関する実務者による情報交換と議論する機会についての検討を行います。

教職大学院担当者の力量形成とその組織
Session IV 17:30-18:40

福井大学教育地域科学部 第 1 号館 第 13 講義室
実践と理論の両輪を捉え、新しい実践研究を軸とする教職大学院の実現は、その新しい実践研究の担い手である実践者からどのように進んでいるか、教職大学院の担当者の力量形成をどう実現していくか、それを支えるために何が必要になるか、話し合った、そして教職大学院の可能性が拓ける可能性について考えます。

3/4(sun)
8:40-15:20

学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007
実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

福井大学教育地域科学部 第 1 号館 第 11/12/13/14 講義室

地域や職業で自分たちの実践をじっくり吟味し、その考察をもとに実践を振り返り、地域や職業を大人同士が実践を通して学び合う協働体 (コミュニティ) に変えていく。その中で一人一人が、最終的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されていきます。進行過程をまねながら大方向に導かれていくような取り組みを、より広く伝えたい、同じの展開を開き取り、学び合う場を作りたいと思います。

はじめに：金のめだについて
8:40-8:50 第 11/12/13/14 講義室

session V 原田を語る「プロセス」を聞き取る part1
8:50-12:10 第 11/12/13/14 講義室

(小グループで実践の展開を聴き合います)
実践展開を土台に実践の歩みをお話していただきます。心に残っている場面、言葉、言葉、行為、その時々の想いを話してください。お話しを聞いていただくことが、話し合いと語りかけの中で進んでいくこと、いま改めて振り返り考えていくこと、話せる展開に耳を傾け、言葉の通を共有し成長の学びの力を培ってほしいと思います。実践の展開をまねながら大方向に導かれていくような取り組みを、より広く伝えたい、同じの展開を開き取り、学び合う場を作りたいと思います。

8:50-9:05 自己紹介 / 9:05-10:35 報告 1 / 10:40-12:10 報告 2
予定されている主な報告：伊藤小次郎/福井大学/福井市立立花中学校・福井大学
教育実践研究センター/福井大学/福井市立立花中学校・福井市立立花中学校/伊藤小次郎/福井大学/福井市立立花中学校

session VII 展開を語る「プロセス」を聞き取る part2
12:30-15:20 第 11/12/13/14 講義室

(午後に引き続き小グループで実践の展開を聴き合います。報告 3)

開催実績一覧

開催期日	公開研究会の名称	主要テーマ	参加者(概数)	
第 1 回	平成13年11月10～11日	実践研究福井ラウンドテーブル2001	20	
第 2 回	平成14年 3月16～17日	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2002	教育系学部・大学院再構築の方向性と教育実践研究	30
第 3 回	平成14年 7月13～14日	実践研究福井ラウンドテーブル2002	30	
第 4 回	平成15年 3月15～16日	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2003	学校改革のための教育実践研究と21世紀の教師教育	40
第 5 回	平成15年 7月12～13日	実践研究福井ラウンドテーブル2003	実践し省察するためのコミュニティ	40
第 6 回	平成16年 3月13～14日	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2004	教育実践研究と学校改革のための公開研究会	40
第 7 回	平成16年 7月3～4日	実践研究福井ラウンドテーブル2004	実践し省察するためのコミュニティ	70
第 8 回	平成17年 3月5～6日	日本における教職専門職大学院のための福井会議 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2004	学校拠点の教師の実践的力量形成と専門職大学院 (横須賀薫・佐藤学・アン・リーパーマン他) 実践し省察するためのコミュニティ	100
第 9 回	平成17年 7月9～10日	実践研究福井ラウンドテーブル2005	実践し省察するためのコミュニティ	60
第10回	平成18年 3月4～5日	日本における教師教育改革のための福井会議2006 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2006	公教育改革と教職大学院の課題実践し省察するための コミュニティ(田中孝彦・石川英志・新田正樹 他)	100
第11回	平成18年 7月3～4日	実践研究福井ラウンドテーブル2006	実践し省察するためのコミュニティ	60
第12回	平成19年 3月3日～4日	日本における教師教育改革のための福井会議2007 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2007	教職大学院のカリキュラム：デザインと組織 (無藤隆・新田正樹・松本健一他) 実践し省察するためのコミュニティ	120
第13回	平成19年 6月30日～7月1日	実践研究福井ラウンドテーブル2007	実践し省察するためのコミュニティ	80
第14回	平成20年 3月1～2日	日本における教師教育改革のための福井会議2008 学校改革実践研究福井ラウンドテーブル2008	知的基盤社会に生きる力を培う教育と教職大学院の 課題(横須賀薫・新田正樹・松本健一他) 実践し省察するためのコミュニティ	160

(日本の教師教育改革のための福井会議 2007 年度報告書)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由
(水準)
期待される水準を大きく上回る

2-10

(判断理由)

学校や地域社会の期待に応え、新しい時代の教育を学校と地域で支える専門的・実践的な担い手を育てるために、高い実践的な教育研究能力を備えた教員の採用を計画的・組織的に進めている¹⁾。

- 1) 資料 1-1-4：学部・研究科企画委員会要項：P5
- 資料 1-1-5：実務家教員公募要項例：P5
- 別添資料 1-1：学部・研究科企画委員会を中心とした学部・大学院の充実に向け・・・：P36
- 別添資料 2-1：教職開発専攻（教職大学院）設置構想：P38
- 別添資料 2-2：既設大学院の改組計画の概要：P39

教育内容・方法等を改善するための組織が整備され、FD活動が活発に行われ授業の改善に結びついている²⁾。特に平成 17 年度以降の全国に例を見ない各学部・研究科を越えての全学FDフォーラムの取組や、平成 18 年以降の研究科が主体となった「教材開発研究会セミナー」とワークショップ・シンポジウムの定期的な開催等を通して、大学院教育の改善に組織的に取り組んでいる³⁾。

- 2) 資料 1-2-1：FD活動状況と報告書：P7
- 3) 資料 1-2-4：教材開発研究会活動状況：P9

教師教育改革のために開催してきている年 2 回の公開研究集会は、全国的にも注目されるものとなり、多くの参加者を得ている。そこでの検討を踏まえて、研究科における実践的力量形成のための教育内容・方法について改善を重ね、教職大学院の設置と大学院改革に結びつけることができた。これらの取組は学校関係者や地域の期待に十分に込んでいることを示している⁴⁾。

- 4) 資料 1-2-5：日本における教師教育改革のための福井会議：P10

分析項目 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 2-1 教育課程の編成

(観点到に係る状況)

教員の実践的力量形成のため、本研究科では附属学校や教育文化施設等との協力関係のもとに実践研究を中心に据えた「教育実践研究」を必修科目とする教育課程を編成している。また、学校改革実践研究コースでは、学校を拠点とした長期にわたる協働実践研究（学校改革実践研究 ～）を中心とするコアカリキュラムを実現している【資料 2-1-1, 資料 3-1-1, P19】。学校改革実践コースの取組は平成 17・18 年度の文部科学省教員養成 GP に採択され、中教審の教職大学院のカリキュラムイメージにも反映されている。【資料 2-1-2, P12】。

資料 2-1-1 学校教育専攻・学校改革実践研究コースの教育課程

夜間主・学校改革実践研究コース
1) 学校教育専修

区分	分野	授業科目	単位数		毎週授業時間		備考
			必修	選択	前期	後期	
教育実践研究		教育実践研究	2		2		修得単位数 30単位以上 教育実践・研究に関する 科目 4単位 1)学校教育研究 2単位 2)教育実践研究 2単位 学校改革実践研究 3～16単位 自由選択科目 * 5～14単位 課題研究 4単位必修 修士論文 必修
		教育実践研究		2		2	
学校教育研究	教育学・教育史	教育基礎学特論		2	2		注： * 全専修の開講科目から 履修（特に指定した科目 は除く）
		日本教育史特論		2	2		
	教育内容・方法論	教授学特論		2	2		
		教育方法特論		2	2		
		生徒指導特論		2	2		
	学校経営	学校経営特論		2		2	
	教育社会学	教育社会学特論		2	2		
		社会教育	社会教育特論		2		
		博物館学特論		2	2		
	道徳教育	道徳教育特論		2		2	
教育心理学		教育心理学特論		2	2		
	学校臨床心理学特論		2	2			
	教育心理学特論		2		2		
発達心理学	認知心理学特論		2	2			
	発達心理学特論		2		2		
	臨床発達心理学研究		2		2		
	認知発達特論		2	2			
	人格心理学特論		2	2			
	臨床心理学特論		2		2		

(次頁へ続く)

資料 2-1-1 (続き)

学校改革に関する科目	学校改革実践研究	学校改革実践研究	2		2		
		学校改革実践研究	2		2		
		学校改革実践研究	2			2	
		学校改革実践研究	2			2	
		学校改革実践研究		2	2		
		学校改革実践研究		2	2		
		学校改革実践研究		2		2	
		学校改革実践研究		2		2	
課題研究	共 通	課題研究	4		2	2	課題研究は2年次に履修する。

印科目は他専修自由選択対象外を示す。

(大学院履修手引き)

資料 2-1-2 中教審教員養成部門専門職大学院ワーキンググループ議事録 (抜粋)

教員養成部会 専門職大学院ワーキンググループ(第2回)議事録 平成17年4月15日(金曜日)
議事概要

実務家教員も、法科大学院などとは違い、教員をしている人だけではなく、行政も附属学校も期待できる実務家教員をどれだけ抱えているのか、というところは問われてくる。また、実務家教員をお願いして、大学院教育を外注化するような形になってはいけない。フィールド研究には専任教員が出る、ということがポイントになるのではないか。その場合に、事例研究をフィールド研究を行うとなると、従来のような授業科目をそろえるだけのカリキュラムではもたないだろう。むしろ科目数は少なくなり、学校等で実践を行ったり分析をしたりすることにかかなりの時間がかかり、そこに単位数がいくのではないか。

専門職大学院は学校と結びついていなければならない。これを附属学校が担えるのか、特定の協力学校が必要になるのか、ということは指導方法とともに非常に大事な問題である。宮城教育大学、福井大学、香川大学で実践的な大学院レベルでのカリキュラムの検討したものができたが、大学よりも現場で行うことを提唱しており、次回以降紹介したい。(ワーキンググループ主査 横須賀薫宮城教育大学学長の発言)

教員養成部会 専門職大学院ワーキンググループ(第3回)議事録 平成17年4月21日(木曜日)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/023/05090501.htm

議事概要

実践的な修士課程のカリキュラムの検討を、福井大学、香川大学、宮城教育大学の3大学で行った。3大学少しずつスタンスの違いはあるが、その中では、今までのような教育現場と連携してというのではもう足りないのではないかと、そうではなく学校現場そのものの中に大学院を作るということを考えないといけないのではないかと考えた。教員養成に関する専門職大学院ができるのであれば、地域の教育委員会との連携というより一緒に作る、あるいは、教育委員会が作るのを大学が援助するというものでなければ、今までと結局同じになってしまうのではないかと。学校において共に研究をするほうがよいものができるのではないかと。今の現職教員の大学院における教育の中で一番の難点は、なかなか来られないということであり、だからどうしても座学的なものが好きで研究論文を書きたい人が来るということである。派遣教員の場合でも同様の点が指摘されている。そうではなく、いくつかのモデルの学校に人事配置をし、そこに入っていきそこで大学と教育委員会が一緒になって研究をする。そこを終えた者が中核的な教員になっていく。当然処遇は前提として教育委員会のほうが考えているということまでいかなくてはならないのではないかと議論をした。(ワーキンググループ主査 横須賀薫宮城教育大学学長の発言)

(配付資料)

資料9 知識基盤社会を支える教職専門職大学院のデザイン (文部科学省初等中等教育局委嘱事業「実践的な教職課程の充実に関する調査研究事業」に基づく3大学合同報告書

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/023/05092801/009.pdf



(文部科学省 H P)

障害児教育専攻の教育課程は、より高度な体系的障害児教育を実践するために、その基盤となる障害児教育学・障害児心理学・障害児生理学に関する専門科目群と、教育科学と連携した実践科目群(特別支援コーディネーター実習)を設け、これらを有機的に関連させている【資料 2-1-3 : P13】。

資料 2-1-3 障害児教育専攻の教育課程表

障害児教育専攻・障害児教育専修教育課程表							
区分	分野	授業科目	単位数		毎週授業時間		備考
			必修	選択	前期	後期	
教育実践研究		特別支援教育コーディネーター実習	2		2		修得単位数 30単位以上 教育実践・研究に関する科目 8単位必修 1)学校教育研究 *1 2～6単位必修 2)教育実践研究 2～4単位必修 3)教科教育研究 *2 0～4単位必修 特別支援教育に関する科目 *3 12単位必修 自由選択科目 *4 6単位自由選択 課題研究 4単位必修 修士論文 必修
		特別支援教育コーディネーター実習		2		2	
特別支援教育に関する科目	共通	特別支援教育研究方法	2		2		注： *1 学校教育専攻・専修の関連講科目から履修 *2 教科教育専攻の各専修の教科教育研究から履修 *3 単位の累積を認める。ただし、その場合は特別支援教育に関する科目12単位については最低2分野以上に亘って履修すること。なお、2回目以降の単位は教員免許状取得のための標準最低修得単位数の外に数える。 *4 全専攻の開講科目から履修(特に指定した科目は除く)
		個別の教育支援計画のデザイン		2	2		
	障害児教育	知的障害教育特論		2	2		
		知的障害者教育課程演習		2	2	2	
		肢体不自由教育特論		2	2		
		肢体不自由者教育課程演習		2	2	2	
		重複障害教育特論		2		2	
		重複障害者教育課程演習		2	2	2	
	障害児心理・生理	病弱者臨床心理学特論		2		2	
		病弱者臨床心理学演習		2	2	2	
		発達障害者心理学特論		2	2		
		発達障害者心理学演習		2	2	2	
課題研究	共通	課題研究	4		2	2	課題研究は2年次に履修する。

印科目は他専修自由選択対象外を示す。

障害児教育専修は、心身に障害を持つ人々に対して科学的な根拠に基づき適切な教育指導や援助を行い、同時に必要な社会的支援についても提案できる人材の養成をめざしている。教育課程は、障害児教育・障害児心理・障害児病理の3分野から構成されているが、各分野が密接に連携し、心身障害児・者とその教育を取巻く現代的な諸問題を解明するための基礎的実験・社会的調査・臨床実践などの方法論が習得できる実践科目が用意されており、特別支援教育はもちろんのこと、学校保健や医療、福祉の領域にも対応できる能力を身につけさせる。

(大学院履修手引き)

教科教育専攻の教育課程は、教科教育の基盤となる各分野の専門的識見を深めるための科目群と教科教育学に関する科目群及び教育科学と連携した実践科目群を設け、高度な教科専門性と教職の専門性を担保するための適切な科目構成・配置となっている【資料 2-1-4：P14】。

資料 2-1-4 教科教育専攻の教育課程表（抜粋）

教科教育専攻・国語教育専修教育課程表

区分	分野	授業科目	単位数		毎週授業時間		履修の方法
			必修	選択	前期	後期	
教育実践研究		教育実践研究	2		2		修得単位数 30単位以上 教育実践・研究に関する科目 10単位必修（脚注参照）
		教育実践研究		2		2	
教科教育研究	共通	国語科教育研究	2		2		1)学校教育研究 *1 2～4単位必修 2)教育実践研究 2～4単位必修
		国語科教育研究		2	2		
教科 に 関 する 科 目	国語科教育	国語科教育特論		2	2		3)教科教育研究 *2 2～4単位必修 教科に関する科目 *3 10単位必修 自由選択科目 *4 6単位自由選択 課題研究 4単位必修 修士論文 必修 注： *1 学校教育専攻・専修の 関連開講科目から履修 *2 本専修の関連開講科 目から履修 *3 本専修の関連開講科 目から履修 国語科教育実践研究を除 き、単位の累積を認める。 ただし、その場合は教科に 関する科目10単位につい ては最低2分野以上に亘っ て履修すること。なお、2回 目以降の単位は教員免許 状取得のための標準最低 修得単位数の外に数える。 *4 全専攻の開講科目から 履修（特に指定した科目は 除く） なお、教員免許を持たない 学生で所属専攻の承認を得 た場合には、上記履修要件 にかかわらず、教育実践・研 究に関する科目の履修を学 校教育研究2単位、教育実 践研究2単位、教科教育研 究2単位の6単位必修、教科 に関する科目の履修を6単位 必修及び自由選択科目の履 修を14単位自由選択と読み 替え、更に、注記*3のた だし書以下は適用しないもの とする。
		国語科教育特別演習		2		2	
		国語科教育特論		2		2	
		国語科教育特別演習		2		2	
		国語科教育実践研究	4	2	2		
	国語学	国語学特論		2	2		
		国語学特別演習		2		2	
		国語学特論		2		2	
		国語学特別演習		2	2		
		日本語教育特論		2	2		
	日本語教育特別演習			2		2	
				2		2	
	国文学	国文学特論		2	2		
		国文学特別演習		2		2	
		国文学特論		2	2		
		国文学特別演習		2		2	
	漢文学	漢文学特論		2		2	
		漢文学特別演習		2	2		
		漢文学特論		2	2		
		漢文学特別演習		2		2	
漢文学特論			2	2			
漢文学特別演習			2		2		
書道	書道特論		2		2		
	書道特別演習		2	4			
	書道特別演習		2		4		
課題研究	共通	課題研究	4		2	2	課題研究は2年次に履修する。

注) 教育実践・研究に関する科目10単位は、下の表のA、B、Cのいずれかの組み合わせで修得すること。

科目区分	A	B	C	備考
1)学校教育研究	2	4	4	科目区分毎に最低2単位以上4単位迄の範囲で、合 計10単位となるように組み合わせること。
2)教育実践研究	4	4	2	
3)教科教育研究	4	2	4	
合計単位数	10			

（大学院履修手続き）

教育・実践に関する科目の改善

中期計画期間中の取組として進められた「学校改革に資する教師の力量形成のためのカリキュラム開発と改善」についての検討を踏まえ、平成20年度から、現行の「教育実践研究（2～4単位必修）」を発展充実させ「協働実践研究プロジェクト（8単位必修）」を新学校教育専攻及び教科教育専攻の教育課程に設ける。このプロジェクトには、主に学校教育専攻が取組む「コミュニティ学習支援」「特別支援コーディネータ」と、教科教育専攻が主体となる「カリキュラム開発プロジェクト」があり、最終的に豊富な実践事例をもとにした包括的なカリキュラムまたは政策等の提案を行う。（詳細は別添資料2-2：既存大学院の改組計画の概要、P39を参照）

観点 2-2 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

専門的力量を備えた教員の養成と、現職教員等の再教育という社会的要請に応えるために各専攻に夜間主コースを設けるとともに、大学院設置基準第14条特例を適用して、夜間または休日を利用した履修および研究指導ができるように配慮している。また多様な就学機会を提供するために、平成17年度より「大学院長期履修制度」を導入し、修学者のライフスタイルに配慮した柔軟な履修形態を可能とする教育課程を編成している【資料1-1-2:P4, 資料1-1-8:P6】。

他学部出身者で新たに教員免許取得を希望する者や、他種免許の取得を希望する者のために、在学中に一種免許及び専修免許の取得が可能な「教育職員免許取得プログラム」を平成18年度から実施している。平成18年度は3名、平成19年度は5名の入学者がこの履修制度の利用している【資料2-2-1】。

資料 2-2-1 教育職員免許取得プログラム実施状況

入学年度 専修	氏名	入学前取得免許 取得希望免許		許可免許	備考
平成19年度 学校教育	A	なし 小学校1種, 中学校(国語・英語)1種, 高校(国語・英語)1種		小学校1種	
平成19年度 障害児教育	B	なし 小学校1種, 中学校(英語)1種		小学校1種	
平成19年度 数学教育	C	高校(数学)1種 小学校1種, 中学校(数学)1種		小学校1種	平成19年度後期から科目等履修生出願希望・中学校(数学)1種
平成19年度 英語教育	D	中学校(英語)1種, 高校(英語)1種 小学校1種		小学校1種	
平成19年度 英語教育	E	中学校(英語)1種, 高校(英語)1種 小学校1種		小学校1種	
平成18年度 学校教育	F	なし 小学校1種, 中学校(英語)1種, 高校 (英語)1種		小学校1種	
平成18年度 障害児教育	G	なし 小学校1種, 中学校(数学)1種, 高校 (数学)1種, 養護学校1種		中学校(数学) 1種	
平成18年度 数学教育	H	高校(数学)1種 小学校1種, 中学校(数学)1種		小学校1種	平成19年度後期から科目等履修生出願希望・中学校(数学)1種



(教育職員免許取得プログラムパンフレット及び基礎資料)

科目等履修生として学部の教職関連科目等を履修することにより、二種免許を一種免許に更新できる制度を設けている【資料2-2-2】。

資料 2-2-2 学部授業科目の履修

福井大学大学院教育学研究科規定(抜粋)		科目等履修生の状況																
(履修方法) 第5条 学生は、在学期間中に授業科目30単位以上を修得し、かつ研究指導を受けなければならない。 10 指導教員が必要と認めた場合は、教育学研究科委員会の議を経て、学部の授業科目を履修させ、これを教育学研究科で修得した単位とすることができる。ただし、当該修得単位は修了要件の30単位には参入しないものとする。																		
		<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>科目等履修生数</th> <th>修得単位数</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>平成16年度</td> <td>0</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>平成17年度</td> <td>2</td> <td>17</td> </tr> <tr> <td>平成18年度</td> <td>1</td> <td>4</td> </tr> <tr> <td>平成19年度</td> <td>3</td> <td>6</td> </tr> </tbody> </table>		科目等履修生数	修得単位数	平成16年度	0	0	平成17年度	2	17	平成18年度	1	4	平成19年度	3	6	
	科目等履修生数	修得単位数																
平成16年度	0	0																
平成17年度	2	17																
平成18年度	1	4																
平成19年度	3	6																
(大学院履修手引き)		(基礎資料)																

社会や学校関係者の要請に応じて、平成17年度より、大学院1年次生が1年間にわたって附属学校の教育活動を支えるインターンシップ制度を導入した。その中で学部生の教育実習時には大学院生が附属小中学校・養護学校にサポーターとして参加し、指導教

員の補助と実習生の支援活動も行っている。これらは全国的にもユニークなインターンシップ制度として、経験した大学院生の評価も高く、教職大学院でのインターンシップにつなげる役割を果たした【資料 2-2-3，資料 5-2-2：P32】。

資料 2-2-3 附属学校におけるインターンシップ制度

附属学校に関する目標を達成するための措置
 <大学院教育学研究科でのインターンシップ制度の導入による大学院生の受け入れや夜間主・学校改革実践研究コースを活用した共同研究・教師教育を実施する。>
 平成17年度から大学院教育学研究科修士課程1年の院生が附属小・中・特別支援学校に長期のインターンシップに参加している。小学校は17年度から19年度まで毎年2名の大学院1年生が週3回非常勤講師としてインターンシップを経験している。授業のサポートや行事への参加など、院生の研究テーマと関連を持ちながら参加している。中学校と特別支援学校は非常勤講師としての枠ではないが、17年度と18年度の2年間をインターンとしての院生を派遣した。大学では、インターンシップの省察を行い、どのような内容で附属学校と関わっているのか、授業への関わりについて、など自由に振り返る場を作っている。大学で行う7月と3月のラウンドテーブルにはインターンシップとして学んだことを報告してもらっている。また、夜間主・学校改革実践研究コースの院生は、それぞれの職場が拠点校としての位置づけであるが、附属学校園の実践から学ぶものが多い。改革実践研究コースの院生が附属の公開研究会へ参加して学んだり、大学で開催するラウンドテーブルに参加して、附属の先生方の実践報告を聞く機会を設けている。附属学校園の実践が、これからの日本の学校教育の在り方を指し示す役割は大きいと考えている。

補足 このインターンシップ制度は、教職大学院での長期インターンシップ制度（別添資料 2-1：P37，教職開発専攻（教職大学院）設置構想）が実施されるまでの間、先進的な役割を果たしている。

（外部評価のための資料「附属学校園の中期目標・中期計画からみた評価」，平成19年）

資料 2-2-4 大学院免許法認定公開講座実施状況

社会の要請に応じて、現職教員を対象とした大学院免許法認定公開講座を実施し、学校教育の今日的な実践的課題について協働して探究する場を設けてきた【資料 2-2-4】。

年 度	講座名	認定科目名	担当者数	受講者数	単位
平成16年度	実践し省察するコミュニティー	社会教育特論	4名	1名	2
	学校づくりのための教育実践研究	教育実践研究	4名	2名	2
平成17年度	学校づくりのための教育実践研究	教育実践研究	2名	2名	2
平成19年度	教授学徳論	教授学特論	5名	11名	2
	教授学演習	教授学演習	5名	11名	2
	学校改革実践研究	学校改革実践研究	5名	11名	2

（外部評価のための資料，平成19年）

就職支援：学生の要請に応じて、学部就職委員会（研究科も兼ねる）が主体となって福井県教育長による教員採用試験に関する講演会を開催したほか、教育委員会による説明会，教員採用試験論文勉強会，教員採用試験模擬面接を実施するなど適切に大学院生を支援している【資料 2-2-5】。

資料 2-2-5 就職支援に関する活動状況（平成19年度）

	日	場所	支援事業の名称等	テーマ&概要等	備考
4月	3～末日		就職情報提供の希望調査	就職情報提供の希望調査表提出	新3年・院1年
	20(金)	教育1号館 大2講義室	就職（教職）ガイダンス —大阪市教育委員会教員等説明会—	大阪市の教員の現状及び 採用に関する手続き事項の説明	4年・院2年 及び 希望者
	20(金)	教育1号館	公務員講座募集ガイダンス(福大生協)	公務員試験対策学内講座説明会	希望者
5月	9(水)	教育1号館	公務員講座募集ガイダンス(福大生協)	公務員試験対策学内講座説明会	
	11(金)	教育1号館 大2講義室	福井県インターンシップ制度事前説明会	・講演「企業が求める人材」 ・「福井県インターンシップ制度」説明	希望者
	18(金)	教育1号館 大2講義室	就職（教職）ガイダンス —福井県教員採用試験説明会— —京都市教育委員会教員採用説明会—	・講演「教員採用試験に向けての心構え」 ・教員採用志願書作成の留意事項	4年・院2年 及び 教員希望者
	21～25	掲示	教員採用試験模擬面接 (教育地域科学部就職委員・本学)		教員希望者
	24(木)	掲示	平成20年度福井県公立学校教員 採用志願者選考試験実施要項公表	・福井県教員採用志願書受付期間(6/8) ・就職支援室での志願書提出期限(6/5)	4年・院2年 及び
6月	29(火)	教育1号館 13講義室	教員採用模擬試験 (有料) (福大生協)	・教養、専門、論作文 各2000円 ・専門は申し込み時に17科目から選択	教員希望者
	1(金)	教育1号館 21講義室	公務員試験対策講座 (有料) (福大生協)	・教養、専門併せて13科目 ・全240コマ(一般行政職ほか対応)	公務員希望者
	22(金)	教育1号館 大2講義室	就職ガイダンス —これからの就職活動— (毎日コミ・ディスコ・人材情報センター)	・就職活動すべてのポイント教えます ・職務適正テスト ・見落としがちな就職活動の落とし穴	3年・院1年

(次頁へ続く)

資料 2-2-5 (続き)

7月	7(土)	福井県自治会館	インターンシップ事前研修会	福井県インターンシップ参加申込者の事前研究会	申込者
	27(金)	掲示	教員採用試験論文勉強会		教員希望者
8月 9月		各企業等	インターンシップ実施		申込者
10月	19(金)	教育1号館 大2講義室	就職ガイダンス -インターネット活用講座- (リクルート・福井県就職支援機構)	・インターネット等の活用法 ・就職活動の心得と県内企業の雇用情勢について	3年・院1年
	26(金)	教育1号館 大2講義室	就職ガイダンス -エントリーシート作成講座- (毎日コミ・アイバック)	・エントリーの仕方と エントリーシートの書き方まで ・福井大学求人票閲覧システムの活用法	3年・院1年
			福井県インターンシップ事業報告会		
11月	9(金)	教育1号館 大2講義室	就職ガイダンス ・産業職業研究セミナー (講演会) ・職業適性テスト (無料) (福井県雇用能力開発機構)	各企業の人事担当者から、企業の求める人材と採用試験等の説明を受ける ・職業適性テスト ・自己分析・自己適性の仕方	3年・院1年
	16(金)	教育1号館 大2講義室	就職(教職)ガイダンス -教員採用試験対策講座- (時事通信出版局)	・教職を目指す学生の心構え ・教員採用試験対策から採用のポイント	3年・院1年
12月	14(金)	教育1号館 大2講義室	就職ガイダンス ・面接講座- (日経ディスコ) ・SPI模擬試験 (福大生協)	・企業訪問・面接の基本マナー ・面接のポイント ・SPI基礎能力測定・性格適性検査	3年・院1年
	24(月)	総合研究棟I 13階 大会議室	企業説明会 -地域共同研究センター (参加企業60社)	各企業人事担当者から企業の求める人材と採用試験等の説明を受ける	3年・院1年
1月	11(金)	教育1号館 大2講義室	就職ガイダンス -就職活動体験報告会- (本学学生6名)	・本学先輩方の就職活動の流れ ・実践的な就職活動体験談	3年・院1年
	26(月)		就職講座 (福大生協)	・メディア活用講座 ・就職活動のためのメディア活用法	希望者
2月	7(木)	総合研究棟I 13階大会議室	教育地域科学部 企業説明会・懇談会	各企業人事担当者から企業の求める人材と採用試験等の説明を受ける	3年・院1年
		掲示	教員採用対策 (福応会関係者・教育地域科学部就職委員)	教員採用模擬面接	教員希望者
	13-14 18-19	総合研究棟I 13階大会議室	合同企業説明会	各企業人事担当者から企業の求める人材と採用試験等の説明を受ける	3年・院1年
3月	下旬	ハローワーク	就職懇談会	新規大学等卒業予定者との就職問題懇談会	

今年度より論文指導支援相談を始めます。実施日時：5/25-7/27の各金曜日
場所：福井大学附属教育実践センター相談室

(外部評価のための資料、平成19年)

外国人留学生の受入: 研究科では、学部及び研究科留学生委員会が窓口となって外国人留学生を積極的に受入れ、異文化交流教育を推進している。学部・研究科で受入れた外国人留学生のうち約4割が研究科に所属している【資料2-2-6】。

資料 2-2-6 外国人留学生の在学状況

年度	区分	数	出身国	計
16	学部生	国費		8
		私費	中国 8	
	大学院生	国費	1 中国 1	11
		私費	10 韓国 1, 中国 9	
	研究生・教員 研修留学生	国費	5 ミャンマー 1, タイ 1, フィリピン 1, ブラジル 1, ドイツ 1	12
		私費	6 中国 4, 台湾 2	
科目等履修生	国費	2 オーストラリア 1, ドイツ 1	6	
	私費	4 中国 3, ドイツ 1		
17	学部生	国費		4
		私費	4 中国 4	
	大学院生	国費		12
		私費	12 中国 12	
	研究生・教員 研修留学生	国費	6 インドネシア 1, フィリピン 1, 韓国 1, メキシコ 1, ドイツ 1, モロッコ 1	9
		私費	3 バングラデシュ 1, インドネシア 1, 中国 1	
科目等履修生	国費	2 ドイツ 1, デンマーク 1	8	
	私費	5 韓国 2, 中国 3, 台湾 1		
18	学部生	国費		1
		私費	1 中国 1	
	大学院生	国費		18
		私費	18 バングラデシュ 1, 中国 17	
	研究生・教員 研修留学生	国費	6 タイ 1, ラオス 1, メキシコ 1, コスタリカ 1, ベルギー 1, ドイツ 1	9
		私費	3 中国 3	
科目等履修生 特別聴講生	国費	1 ドイツ 1	9	
	私費	8 韓国 1, 中国 5, ドイツ 1, アメリカ合衆国 1		
19	学部生	国費		3
		私費	3 中国 3	
	大学院生	国費	1 バングラデシュ 1	16
		私費	15 ミャンマー 1, 中国 14	
	研究生・教員 研修留学生	国費	5 ミャンマー 1, ブラジル 1, ベルギー 1, ドイツ 1, イエメン 1	7
		私費	1 モンゴル 1, 中国 1	
科目等履修生 特別聴講生	国費	1 ドイツ 1	15	
	私費	14 中国 9, 台湾 2, ドイツ 2, アメリカ合衆国 1		

注：特別聴講生は協定校からの科目等履修生

(外部評価のための資料、平成19年)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

学校関係者の期待に応え教員の実践力を形成するために、学校拠点の実践研究を中心とする夜間主・学校改革実践研究コースを設け、「学校改革実践研究」を核とした教育課程を編成している。その成果は報告書『学校改革実践研究』として刊行され高い評価を得ている¹⁾。このコースの取組は平成 16 年度「特色ある教員養成推進プログラム」に採択されるとともに、中教審での教職大学院カリキュラム構想にも反映され、21 世紀の教員養成改革を先導する取組として高く評価されている²⁾。

¹⁾ 資料 2-1-1：学校教育専攻・学校改革実践研究コースの教育課程：P11，

資料 3-1-2：学校改革実践研究の取組と報告書：P20

²⁾ 資料 2-1-2：中教審教員養成部門専門職大学院ワーキンググループ議事録（抜粋）：P12

高度な教職専門性と教育実践力を身に付けた教員を養成するために、各専攻の教育課程はそれに必要な科目を整備し、専門科目と実践科目（教育実践研究）を有機的に連携させることで、充実した内容となっている³⁾。

³⁾ 資料 2-1-3：障害児教育専攻の教育課程表：P13

資料 2-1-4：教科教育専攻の教育課程表（抜粋）：P14

現職教員や社会人の期待に応えるために、就学を支援する柔軟な教育課程及び履修制度を整備しており、現職教員の再教育という社会的な要請にも十分に対応している⁴⁾。

⁴⁾ 資料 1-1-2：夜間主コース，教育方法の特例，長期履修学生に関する規程：P4

資料 1-1-8：夜間主コース入学者数：P6

資料 2-2-1：教育職員免許取得プログラム実施状況：P15

大学院生の期待に応えるために、適切な就職支援体制を整備している⁵⁾。また、教職に関するインターンシップ制度については、平成 19 年度までの先導的取組が教職大学院での長期インターンシップ制度にも結びついている⁶⁾。

⁵⁾ 資料 2-2-5：就職支援に関する活動状況：P16

⁶⁾ 資料 2-2-3：附属学校におけるインターンシップ制度：P16

資料 5-2-2：修了者及び関係者からの聞き取り調査：P32，

別添資料 2-1：教職開発専攻（教職大学院）設置構想：P38

留学支援体制も整備されており、大学間交流による国際化教育も推進されている⁷⁾。

⁷⁾ 資料 2-2-6：外国人留学生の在学状況：P17

分析項目 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 3-1 授業形態の組合せと学習指導方法の工夫

(観点に係る状況)

必修科目の「教育実践研究」は複数の教員が共同で担当し、教員毎のグループに分かれて、主題探求的な授業やフィールドワークなどを行い、最後は全体で報告・交流を行うなど指導方法を工夫している。また専修毎の授業での講義と演習を組合せるなどの工夫を行っている【資料 3-1-1】。

資料 3-1-1 教科教育専攻・理科教育専修教育課程表

教科教育専攻・理科教育専修教育課程表

区分	分野	授業科目	単位数		毎週授業時間		履修の方法
			必修	選択	前期	後期	
教育実践研究		教育実践研究	2		2		修得単位数 30単位以上 教育実践・研究に関する科目 10単位必修(脚注参照) 1)学校教育研究 *1 2~4単位必修 2)教育実践研究 2~4単位必修 3)教科教育研究 *2 2~4単位必修 教科に関する科目 *2 10単位必修 自由選択科目 *3 6単位自由選択 課題研究 4単位必修 修士論文 必修 注: *1 学校教育専攻・専修の 関連開講科目から履修 *2 本専修の関連開講科 目から履修 *3 全専攻の開講科目から 履修(特に指定した科目は 除く) なお、教員免許を持たない 学生で所属専攻の承認を得 た場合には、上記履修要件 にかかわらず、教育実践・研 究に関する科目の履修を学 校教育研究2単位、教育実 践研究2単位、教科教育研 究2単位の6単位必修、教科 に関する科目の履修を6単位 必修及び自由選択科目の履 修を14単位自由選択と読み 替えるものとする。
		教育実践研究		2		2	
教科教育研究	共通	理科教育研究	2		2		
		理科教育研究		2		2	
教 科 に 関 す る 科 目	理科教育	理科教育特論		2	2		
		理科教育特論演習		1		2	
		理科教育特論		2	2		
		理科教育特論演習		1		2	
		理科教育実践研究 - 1		2		2	
		理科教育実践研究 - 2		2		2	
		理科教育実践研究 - 1		2	2		
		理科教育実践研究 - 2		2	2		
		地域自然史研究		2	2		
	物理学	物理学特論 (素粒子論)		2	2		
		物理学特論 (応用光学)		2	2		
		物理学特論 (原子・分子物理学)		2	2		
		物理学特論演習		1		2	
		物理学特論 (プラズマ物理学)		2	2		
物理学特論 (固体物理学)			2	2			
化学	分析化学特論		2	2			
	分析化学特論演習		1		2		
	物理化学特論 (電気分析化学)		2	2			
	物理化学特論 (物理有機化学)		2	2			
	無機化学特論		2	2			
	有機化学特論		2	2			
	有機化学特論演習		1		2		
生物学	天然物有機化学特論		2	2			
	生物科学特論		2	2			
	生物科学特論演習		1		2		
	生物科学特論		2	2			
	生物科学特論演習		1		2		
	生物科学特論		2	2			
地球科学	地球科学特論 (地球進化論)		2	2			
	地球科学演習		1		2		
	地球科学特論 (地球環境論)		2	2			
	地球科学演習		1		2		
	地球科学特論 (地球物理学)		2	2			
	地球科学演習		1		2		
課題研究	共通	課題研究	4		2	2	課題研究は2年次に履修する。

印科目は他専修自由選択対象外を示す。

注) 教育実践・研究に関する科目10単位は、下の表のA, B, Cのいずれかの組み合わせで修得すること。

科目区分	A	B	C	備考
1)学校教育研究	2	4	4	科目区分毎に最低2単位以上4単位迄の範囲 で、合計10単位となるように組み合わせること。
2)教育実践研究	4	4	2	
3)教科教育研究	4	2	4	
合計単位数		10		

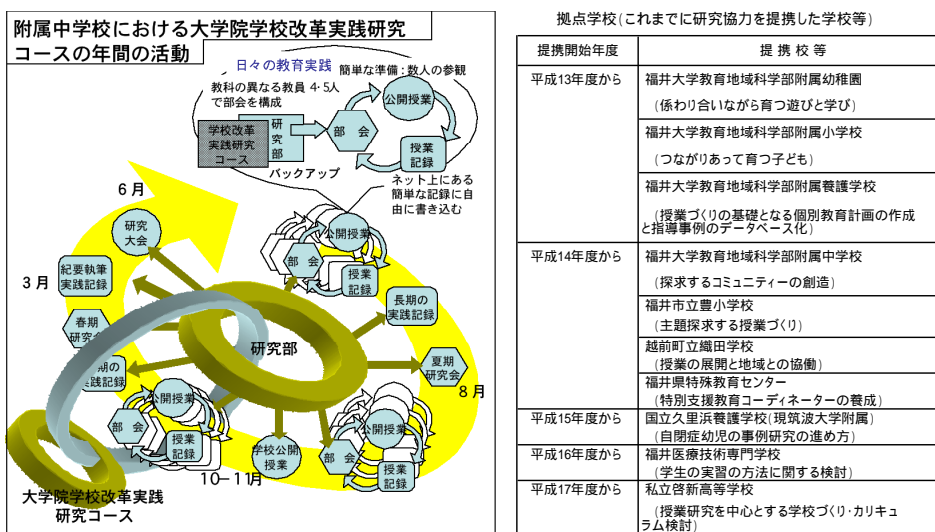
(大学院履修手引き)

必修科目の「教育実践研究」「学校改革実践研究」では、実践・省察・研究のサイクルを重ね、その展開を記録化し共有する教育方法を取入れている。とりわけ学校改革実践研究コースでは、拠点学校における実践の展開を記録化して検討し、その省察に基づいた新たな実践を展開するサイクルで実践と研究との融合を実現している【資料 3-1-2、資料 2-1-1：P11-12、資料 3-1-3：P21、資料 3-1-4：P21-22】。

資料 3-1-2 学校改革実践研究の取組と報告書

「学校改革実践研究」の進め方

学校改革実践研究コースの中核科目「学校改革実践研究 ～（16単位）」は、学校での実践研究に直接大学院の教員が関わり、その学校の直面する課題やテーマに即して協働して研究していくことを中心に据え、これを大学院での正規の授業と結び付けて進めていく。この授業では実際に拠点学校での話し合いや授業づくり、実践の省察に大学院の担当者が参加して進め、最終回には報告書の作成を行う。



実践研究報告（拠点学校における授業改革の展開を跡づける報告書）

安部康子・川崎恵理 『幼児教育における異年齢交流の実践研究』学校改革実践研究報告 1
 赤澤孝弘 『スポーツライフにつながる新しい体育科授業の研究』学校改革実践研究報告 2
 田代光一 『反省的实践による新しい授業デザインの研究』学校改革実践研究報告 3
 余座正之 『省察的授業の時間的展望における実践コミュニティの漸成展開』学校改革実践研究報告 4
 木本 茂 『子どもたちの科学的な探究を支える教師の省察的実践』学校改革実践研究報告 5
 田中浩司 『学校改革と教師の実践共同体』学校改革実践研究報告 6
 森阪康昌 『ものづくりの探究の展開と教師の反省的实践』学校改革実践研究報告 7
 向山誠隆 『協働の実践を省察 再構成する力を培う社会科』学校改革実践研究報告 8
 牧田秀昭 『探究するコミュニティへのプロセス』学校改革実践研究報告 9
 小野直樹 『実践コミュニティとしての学校』学校改革実践研究報告 10
 石田圭二 『ナラティブを用いた作業療法臨床実習の振り返り』学校改革実践研究報告 11
 市波和子 『看護実践能力育成に関する実践研究』学校改革実践研究報告 12
 木田 章 『ST養成における実習教育を振り返ることで見てきた『実践の中の知』』学校改革実践研究報告 13
 竹澤 勇 『つながりあって育つ—物語教材を使った授業で培われる学びの探究』学校改革実践研究報告 14
 竹澤宏保 『理科学習における探究活動の構成と科学的リテラシー』学校改革実践研究報告 15
 田中秀史 『つながりあって育つ—子ども達の学び合いを意識した主体的な学習の在り方を探る』学校改革実践研究報告 16
 平馬 隆 『一私立高等学校における教育相談的対応の実践史と今後の展望』学校改革実践研究報告 17
 與河かおり 『臨床実習で問題を抱える学生とそれを支える教師の役割』学校改革実践研究報告 18
 板垣英一 『子どもの探求的学びの成長プロセスの省察的研究』学校改革実践研究報告 19
 及川三枝子 『精神看護学実習における学生の成長プロセスの省察的研究』学校改革実践研究報告 20
 荻原昭人 『学校改革への挑戦』学校改革実践研究報告 21
 坂田 薫 『子ども・教師・保護者・地域における学びの実践研究』学校改革実践研究報告 22
 繁田里美 『学生の省察を支える終末期実習改革』学校改革実践研究報告 23
 島本幸恵 『授業と実習をつなげるための学びの構築』学校改革実践研究報告 24
 清水継子 『個の歩みに即した実習経験の再構成』学校改革実践研究報告 25
 藤本真己 『学びの連続性が育んだ探求心』学校改革実践研究報告 26
 渡邊輝美 『省察的看護学実習と看護実践力の育成』学校改革実践研究報告 27
 斎藤 綾 『探究的な授業づくりをめざす教師の協働研究の展開と実践認識の発展過程』学校改革実践研究報告 28
 澤本 恵 『科学的リテラシー形成を目指す探究型カリキュラムの構成と実践』学校改革実践研究報告 29
 鈴木瑞穂 『生活科における協働活動と実践コミュニティの発展に関する実践研究』学校改革実践研究報告 30
 野路拓史 『長期にわたる探求的な学びの実践とコミュニティの展開についての省察的研究』学校改革実践研究報告 31

（次頁に続く）

資料 3-1-2 (続き)

学校改革実践研究コース大学院生のコメント

福井新聞(平成 17年 3月 7日)掲載記事「福井大コース開設 4年、実践を理論で裏付け」より抜粋

これまで同大附属中学や福井市立豊小など 7校が拠点校となった。このうち、はるばる県外から同コースで学ぶ意義を見だし、拠点校になったのが神奈川県筑波大学附属久里浜養護学校。院生の教師二人と福井大の教官が昨年度から 2年間距離の壁を越えて互いに行き来を繰り返した。軽度発達障害に代表される障害の多様化・重複化や、個々人の障害の特性に応じたサポートを行う特別支援教育導入の流れを受け、教師の専門性向上の必要性を感じていたという二人。知的障害と自閉症を併せ持つ幼児との関わりの中で、信頼関係の築き方や支援の在り方を研究した土崎修教諭(42)は「大人の考え方を押し付けず、子供のニーズを見極めて適切な支援を行う大切さを学んだ」。虐待を受けた子供や知的障害児との関わりを通し、支援方法の理論化に取り組んだ菅原伸康教諭(37)は「大学教官の専門的な助言を得て、これまでの実践が理論で裏付けられ、自信になった」と振り返る。

(外部評価のための資料,平成 19年度)

資料 3-1-3 附属学校での授業づくりへの参加

附属学校に関する目標を達成するための措置

<附属学校教諭と大学教員からなる研究部会を中心に研究組織を構築し、中学校選択教科、小学校カリキュラムでの教科担任制、校園間及び異学年間の交流学習、養護学校での自立と社会参加のための地域の支援・連携の在り方について教育研究を推進する。>

・中学校においては、平成16年度から選択教科の授業に大学教員と大学院生が参加して協働して授業づくりを行ってきた。教科としては社会科と理科の授業の中で、生徒の興味・関心を活かしながら、さらに専門的な教科内容について構想し実践してきた。

(外部評価のための資料「附属学校園の中期目標・中期計画からみた評価」,平成 19年)

修士論文作成に係る授業として「課題研究」を設け、研究テーマの策定、文献や情報の収集、研究方法、教育実践等の計画立案及び分析等を教員と議論しながら進めることで、大学院生が主体的に修論作成に臨むことができるように工夫している。また、2年次に学校現場に戻る現職教員の研究指導については、1年次より課題研究の履修を開始するとともに、時間外に指導時間を設けるなど柔軟な対応をとっている【資料 1-1-2:P4】。

教育課程の編成趣旨に沿った適切なシラバスが作成され、ウェブ上でシラバスが閲覧できるシステムを構築し、授業に活用されている【資料 3-1-4】。

資料 3-1-4 シラバスの例

大学院教育学研究科 専攻共通科目
授業科目名: 学校改革実践研究Ⅰ

担当教員: 寺岡 英男, 森 透, 柳澤 昌一, 松木 健一

科目区分: 学校改革に関する科目

開放科目

開講時期: 1年 前期

単位数: 2

研究室: 教育地域科学部1号館5階

E-mail: mori@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp, yanagi@edu00.f-edu.fukui-u.ac.jp

個別キーワード

授業づくりの長期実践事例研究

個別キーワード

授業の構想・実践・評価/学校拠点協働実践の展開と省察

授業の目標

学校を拠点に、自分たちの学校の掲げる課題に即した授業づくりを協働で進め、その展開を省察し再構成していくことを中心とする協働研究プロジェクト。

学科等の学習・教育目標との関連

学校改革実践研究コースのコアとなる科目である。

(次頁へ続く)

授業内容

現状と研究テーマに即して授業の主題を設定する。(学校の課題・児童生徒の現状と関心・教科と単元の課題を検討・研究しつつ主題を設定する。)
 具体的な実践プランの作成(児童生徒の学習活動の展開・学習の主題内容題材・授業におけるコミュニケーション編成についての具体的なプランを立てる)
 実践の展開と展開に応じたプランの調整(児童生徒の学習の展開を把握し、それに即した発展のための働きかけを行い、またプランを組み立て直して学習の発展をマネジメントしていく)
 実践展開の跡づけ(主題設定からプランづくり実践の実際の展開過程を資料や記録を踏まえて跡づけ直す)
 実践の記録化と表明と相互評価(学習の展開を記録化し、表明し、相互に評価し今後の展開の課題を明らかにする)
 学校の状況に応じて、年1回から2回、学校の研究主題に即した中核的な授業づくりを進め研究する。

授業方法

主題の共有(学校)(学校-放課後)
 それぞれの方向性を探る(学校-分科会)(学校-放課後)
 それぞれの方向性を共有する。(学校-放課後)
 学習過程の集中研究会(大学-土曜集中)
 授業展開とカンファレンス(学校-授業時間帯と放課後)
 単元の記録についての相談(学校-放課後)
 ラウンドテーブルでの取組の紹介(大学-土曜集中)
 校内での集中実践研究会(学校-夏期休業中-集中)
 (大学での集中的な実践検討・研究)
 学生の目標
 改革の主題と子どもたちの成長に即した授業を開発・実践・省察する。
 改革の主題と子どもたちの現状と成長に即した授業を企画・構想・実践するとともにその展開過程を省察・記録化し表明し、さらにそれを評価して次の実践の展望につなげる。
 評価の方法
 個々の単元について改革の主題と子どもたちの成長に即した授業を開発・実践・省察する。下記の5局面について活動の実際と記録から評価する。
 企画 調査・構想 実践 省察・記録・表明 評価と展望
 教科書・参考書等
 福垣忠彦・佐藤学『授業研究入門』岩波書店,1996
 福井大学教育地域科学部附属中学校研究会編『中学校を創る：探究するコミュニティへ』東洋館出版,2004
 『学校教育実践研究年報』

(平成19年度福井大学シラバス)

観点3-2 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

ラウンドテーブル、教育研究集会等への参加を通じて先進的な実践研究に触れる機会を設け、大学院生の主体的な学習を促している【資料3-2-1, 資料1-2-5:P10】。

資料3-2-1 ラウンドテーブル・研究集会への参加

学校改革実践研究コース修了者聞き取り調査の記録(平成19年3月)より

Sさん

Q:院生で考え方が変わったとか印象に残っていることは?

ラウンドテーブル(実践研究交流集会)は私にとってすごく大きかった。ああいうふうには話をするというか語るっていうことをしたことがなかったし、こうやって団らんでしゃべるのはどうってことないのだけれど、みんなそうかもしれないけど公的な場でやっぱりこういう場って私平気よっていう人もいるとは思うけれど、私は、苦手。ラウンドテーブルでうまく伝えられなくていつも自己嫌悪に陥るのだけれどできない。けれど、あそこの場っていうのは自然とみなさんがフォローしてくださる、その点で否定されないということが大きいことだと思う。

Jさん

Q:「(実践交流会での発表が)2回目だとやっぱり発表も変わりますか?」

そうそう。短い時間で。2段階になってるそれには意図があるよねって、清水先生とも話してたの。やっぱり1回最初にしとくと、自分がどのくらいのペースでどういうふうには発表するかっていうのは、それこそ、省察。自分で分かるじゃないですか。じゃあ2回目はどうしようかって自分で考えて、どのくらいどこを言ったらいかなって。さすが教育学だよなって。そこまで考えてるのかなって。自分で一回まとめて、人にどう伝えるのかっていう。

(外部評価のための資料,平成19年)

(次頁に続く)

資料 3-2-1 (続き)

医療専門学校で教員をしている藤本さんは、大学院の研究を通して福井大学附属中学校の実践『中学校を創る 探究するコミュニティへ』に出会い、そこで展開されている「主題-探究-表現」型の授業を専門学校で実現しようと取り組み、その実践、授業改革の展開を修士論文としてまとめている。その後書きに次のように記されている。

2005年4月に福井大学大学院教育学研究科の門をくぐってから、早2年が経とうとしている。気が付けばあっという間であった。思えば、2005年の3月に福井大学で行われた「実践研究福井ラウンドテーブル2005」に初めて参加したことが、この世界に足を踏み入れる第一歩であった。その当時は、訳も解らぬまま多くの先生方の実践を聞かせていただいた。報告をしてくださった先生方の資料には、詳細な授業展開とたくさんの子どもの声がロングスパンで記録されていた。このような実践を読むことは、どのような流れで授業が構成されていったのかを理解する上では非常に参考になったが、正直、なぜそこまで詳細に記録をする必要があるのかまでは理解できなかった。ただ、いずれ筆者も同じような道を進まなければいけないことだけは自覚でき、「自分も同じような実践報告をすることができるのだろうか」という不安にも似た思いを抱いたことを昨日のこのように鮮明に覚えている。

その後、「物語としてのケア」という書籍¹⁾を読む機会を得た。ここで「ナラティブ」という用語と出会うことになる。「ナラティブ」とは、「語り」や「物語」を意味する。人々の何気ない「語り」の中にも一片の「物語」が含まれており、さまざまな「語り」の断片をつなぎ合わせていくことで、ひとつの壮大な「物語」ができあがる。「物語」は「語り」から生まれ成長し、「語り」は「物語」の延長線上に生み出されていくことを学んだ。ここで、ようやく記録の必要性に気付くことができるようになった。1つ1つの単元を記録として残していくことで、長期にわたって実践を振り返ることが可能になるということを理解できるようになったのである。

2005年8月に行われた福井大学大学院教育学研究科の夏期集中セミナーは、その後の筆者の考え方を形づくる意味で大きな転換期となった時期であった。福井大学教育地域科学部附属中学校²⁾と牧田³⁾の実践報告を自分なりにリフレクションし直すことで、今までの講義を本当の意味でリフレクションできるようになった。それまでの筆者の講義実践は、知らず知らずのうちに詰め込み型の、「目標-達成-評価」型の講義展開であったことをようやく自覚できるようになったのである。「このままじゃいけない」ということにやっと気付くことができた瞬間であった。

そこから約9ヶ月、「主題-探究-表現」型の講義スタイルを目指した講義の実践が行われた。日々、試行錯誤の繰り返しだったように思う。「学び」とは何か、「探究」とは何か、どのようなデザインで講義を展開していけばいいのか・・・このようなことを模索し続けていた。今までの講義を根底から見直し、すべてをリセットして新しく構成し直す作業は、筆者としてはかなり勇気のいる決断だった。「本当にこれでいいのだろうか」と。そんな弱気な思いを打ち消してくれたのは学生たちだった。講義が進むにつれ、少しずつではあるが成長していく学生たち。探究することの楽しさ、学べることの喜びを感じてもらえたのではないかと思えるようになっていった。筆者も、そんな学生たちと一緒に講義をつくっていったことが楽しかった。

今回の実践を行う中で、一番大きく変化したのは筆者かもしれない。筆者の中での講義に対する思いが大きく変わったように感じた。自分が担当する科目に、また、筆者の実践に協力してくれた、福井医療技術専門学校言語聴覚学科第22期生の学生とも真正面から向き合えることができたような気がする。何よりも、学生たちから多くのことを学ばせてもらったことが大きかった。

今思えば、福井大学大学院教育学研究科で多くのことを学ばせてもらったことは、これまでの教員生活および臨床家時代の歩みを振り返る上で大いに役立った。今まで歩んできた道のり、これから歩もうとする道のりが、以前よりもかなり明確に自覚できるようにもなってきた。結局、臨床家時代に抱いていた思いと、これまでの教員生活で自分なりに考えていたことは、それほど違わないことに気付くことができた。「臨床家時代から思っていた、やろうとしていたことはこういうことだったんだ」そう思えてならない。やはり「教育」とは、教師と学生がお互いに歩み寄り、そこにある主題をともに探究し共有していくことが大事であるということを確認できた。筆者が臨床家時代に思っていたことも、それほど間違っただけではないだろう。

福井大学大学院教育学研究科に在籍した約2年間で、少なくとも筆者は変わった。それに呼応するかのようになり、筆者の拙い実践に付き合ってくれた学生たちにも、何らかの変化があっただろう。後は他の専任教員に対して、筆者がどれだけ自己の「物語」を語れるかである。語ることで個々人の「物語」は共有されていく。ゆくゆくはそれが大きなうねりとなって、学校という大きな枠をも変えていけるはずである。学校が変化してこそ、初めて「学校改革」と呼べるのではないだろうか。

1) 野口裕二：物語としてのケア。医学書院，2002

2) 福井大学教育地域科学部附属中学校：中学校を創る - 探究するコミュニティへ - 。東洋館出版社，2005

3) 牧田秀昭：探究するコミュニティへのプロセス - 数学科カリキュラム構成と全体研究運営をデザインする - 。学校改革実践研究報告9，2005

(出典：藤本寛巳『学びの連続性が育んだ探究心 - 従来の講義形式を見つめ直すことで見えてきたもの - 』(平成19年3月))

大学院生が教育実習やライフパートナーでのサポーター、S P P事業でのT A等の教育活動に参与する機会を多く設けることで自主的に実践的指導力を身に付けている【資料 3-2-2：P24，資料 3-2-3：P24】。

資料 3-2-2 S P P における教育支援活動

S P P (サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト) における T A の活用				
年度	事業数	事業名	連携先	T A 数 (延べ)
平成17年度	1	原子・分子のかたちをみる	永平寺町立永平寺中学校	大学院生 9人
平成18年度	3	原子・分子のかたちをみる・考える・想像する	永平寺町立永平寺中学校・上志比中学校・松岡中学校	大学院生 28人 学部生 18人
		生物の細胞とふえ方・DNAって何だろう	あわら市立金津中学校	
平成19年度	4	原子・分子のかたちをみる・考える	永平寺町立永平寺中学校・上志比中学校・松岡中学校	大学院生 31人 学部生 23人 学外 3人
		遺伝子と放射線	あわら市立金津中学校・福井県立金津高等学校	
		福井の豊かな生物生態系と保全・外来種及び生息環境破壊を考える	福井県立丸岡高等学校	
		火山灰・九州からの使者	福井市立社中学校	

S P P に参加した T A のコメント

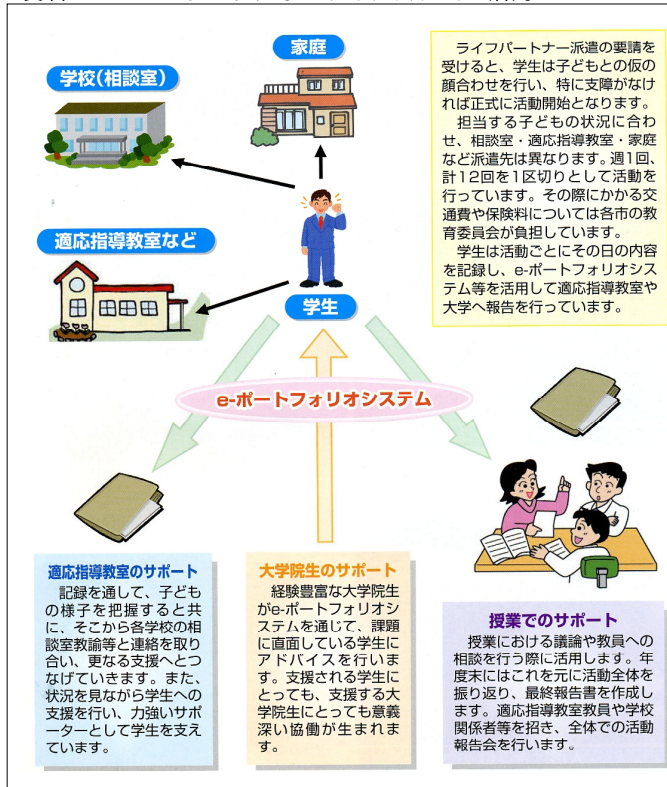
- ・私は、生物の分野は昔からあまり好きではなく、高校のときも化学と物理選択だったので、少し疎遠だったのですが、今回実験を自分自身も行い、さらに、子どもたちに説明する立場となり、生物の実験の面白さを実感できました。
- ・色々な実験道具、面白い科学道具が多くある場所での S P P だったので、T A として入った自分も楽しく参加できた。教える側も子供達の興味を引くものだと相乗効果で良くなると思うので、楽しむ気持ちを忘れず、色々参加していきたい。
- ・短い時間だったが、S P P に参加する中学生は知識があり、科学的な考えができたと思った。また、そのような生徒は何に興味を持つのかも分かった。(今回の実験を)教材として使ってみたら面白いのではないかと気づくことができた。

(基礎資料)

(平成19年度 S P P 事業実施報告書)

専修ごとに院生研究室を設けるとともに、e-ポートフォリオシステムを中心とした情報設備を充実させ、学習及び研究を支援するための環境整備を行っている【資料 3-2-3】。

資料 3-2-3 e-ポートフォリオシステムの活用



(特色 G P 実施報告書, 平成 19 年)

附属図書館を中心に、電子ジャーナル、データベース、学生専門図書等の充実に努め情報環境の整備を進めている【資料 3-2-4】。

資料 3-2-4 学生専門図書費及び電子ジャーナル経費

学生専門図書費 (教育地域科学部・教育学研究科の予算)			
平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
791,000円	840,000円	734,000円	740,000円

電子ジャーナル経費 (全学)			
平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
24,800千円*	54,700千円	56,317千円	62,260千円

*共通経費化前

(図書館運営委員会資料)

授業時間外の学習機会を確保するため、教員ごとにオフィス・アワーを設定し大学院生の学習指導を適切に行っている【資料 3-2-5 : P25】。

資料 3-2-5 オフィス・アワーの設定(教育地域科学部・教育学研究科分)

平成19年度後期 オフィス・アワー (文京キャンパス教員)

◆教育地域科学部			
所属	教員氏名	曜日	時間
高修教育講座	高山 善行	水	14:00~16:00
	藤野 裕	月	12:50~14:30
	澤崎 久和	月	14:30~16:00
	清水 光雄	木	14:30~15:30
	三舟修一郎	月	10:00~12:00
	松友 一雄	金	10:00~12:00
	中根 貞幸	火	14:30~16:00
	D.ジョーンズ	火	10:30~12:00
	大下 邦幸	月	13:00~14:30
	伊達 正紀	火	10:00~12:00
理数教育講座	佐分利 豊	木	16:30~18:00
	黒木 哲徳	月	10:30~12:00
	櫻本 篤司	月	14:45~16:15
	杉谷 貞明	月	8:30~10:30
	伊禮 三之	水	10:30~12:00
	香川嘉一郎	月	10:00~12:00
	中田 隆二	水	14:40~16:10
	藤原 雅浩	火	13:00~14:30
	前田 賢夫	火	12:00~13:00
	大山 智夫	水	14:30~16:00
芸術・保健体育教育講座	中島 正志	火	14:00~16:00
	山本 博文	金	10:20~11:50
	伊佐 公明	月	13:00~14:30
	石井 恭子	月	13:00~14:30
	越野 正徳	火	10:30~12:30
	高木 裕美	月	11:00~13:00
	松濱 敏郎	在室で時間のある限り常時	
	櫻本 龍雄	木	12:00~13:00
	宮崎 光一	月	16:10~17:40
	西畑 敏秀	木	14:30~16:00
生活科学部	荏置 三部	木	16:00~17:00
	池内 恭晴	木	14:30~16:00
	清水 安郎	木	10:20~12:00
	水沢 利珠	火	10:30~12:30
	田中 秀一	月	10:20~11:50
	吉澤 正吾	月	16:30~18:00
	栗倉 隆	月	14:30~16:00
	上田 正徳	火	16:30~18:00
	塚本 充	火	10:30~12:00
	奥野 信一	水	12:00~14:00
石川 和彦	月	13:00~14:30	
生活科学部	村上亜由美	木	10:30~12:00
	坂部由美子	木	12:50~14:20
	菅内 喜子	月	12:00~13:00
	荒井 紀子	水	12:00~14:00
	松田 淑子	木	14:45~16:15
	山根 清志	木	10:20~11:50
	松浦 義則	月	10:00~12:00
	門井 直哉	木	10:30~12:00
	清水 泰幸	水	12:00~13:00
	木村 亮	火	10:30~12:00
社会系教育講座	小林 道徳	木	10:10~12:00
	坂田 登	水	12:30~14:20
	守尾 健夫	月	15:00~17:00
	橋本 康弘	水	昼休み
	寺岡 美男	金	10:00~11:30
	名越 清家	木	16:10~17:40
	松本 健	月	8:40~10:10
	熊谷 高幸	月	18:30~20:00
	石川アツシ	金	10:30~12:00
	三穂 美典	水	16:30~18:00
発達科学講座	岸野 麻衣	火	11:00~12:30
	瀧本 幸福		
	長谷川 麗治		
	上野 澄子		
	島崎 麗子	木	8:40~10:10
	渡谷 政子	月	13:00~14:30
	湊 七雄	水	10:30~12:00
	茂 利光	木	14:45~16:15
	三ト 馨	月	13:00~14:20
	柳澤 昌一	水	9:00~11:00
生涯学習講座	宇野 文男	木	10:30~12:00
	柳澤 章男	金	10:30~12:00
	永井 康弘	火	10:30~12:00
	宮 占雄		
	皆崎 博	木	12:50~14:20
	館 清隆	月	12:50~14:20
	水原 崇紀	木	12:50~14:20
	辻 和彦	木	12:00~13:00
	ジャズ		
	林 捷	木	13:00~14:30
行政実社会	松田 和之	火	14:45~16:15
	今井 花子	水	10:00~12:00
	高木 英行	水	12:50~14:20
	横井 正信	火	16:10~17:40
	伊藤 秀	月	13:00~14:30
	手塚広一郎	月	12:50~14:20
	岡崎 英一	火	12:50~14:20
	中澤 達徳	水	12:00~13:00
	高田 敏博	火	16:00~17:15
	高田 敏博	火	14:00~15:30
地域環境	保科 英人	月	16:00~17:30
	服部 勇	火	10:30~12:00
	松本智恵子	木	8:45~10:15
	井上 博行	月	10:30~12:00
	大野木裕明	月	10:20~11:50
	森 透	火	12:00~13:00

オフイス・アワーの利用について
一気軽に利用してください！

1. 学生の皆さんのいろいろな相談に応じることができるよう、19年度後期から、全教員がオフイス・アワーを持つことになりました。この時間帯には、教員が研究室に在室していますので、希望する教員の研究室を訪ねてください。(出張・会議等で不在の場合もあります)
2. 講義受講の有無、学部・講座・学科等に関係なく相談に応じていただけます。相談の内容によっては、専門の先生方を紹介させていただきます。
3. 履修や学生生活全般の相談に応じます。
4. 相談期間は、平成19年度後期授業期間中です。休業期間中は、助言教員、保健管理センター、学生相談室、就職相談室等に相談してください。
5. 学期途中にオフイス・アワーの追加・変更等がある場合は、掲示等で連絡します。

(学生向け利用案内)

履修指導については、入学時に研究科及び専修単位で指導を行うとともに、指導教員及び専修主任が大学院生の履修状況を学期ごとに把握し、単位の実質化に配慮している【資料 3-2-6】。

資料 3-2-6 教育学研究科オリエンテーション資料(抜粋)

福井大学大学院教育学研究科 オリエンテーション
 日時：平成19年4月6日(金) 13:00~14:00(昼間)/18:00~(夜間主)
 場所：教育地域科学部1号館

履修について

重要：「福井大学大学院学則」と「福井大学教育学研究科規程」、「同履修要項」を必ずよく読むこと。

- ・ 修了要件...2年以上在学+30単位以上修得+研究指導+修士論文の審査・最終試験に合格(長期履修生を除く)
- ・ 各自所属する専修の教育課程表(カリキュラム)に従って履修計画を立て、履修すること。
- ・ 各自所属する専修の教育課程表(カリキュラム)の「履修の方法」をよく読むこと。

重要：履修登録期間内に必ずWEB履修登録をすること。IDとパスワードの管理は各自厳重に!

- ・ 履修計画を立て、履修一覧表及び履修計画表に必要事項や科目、科目コード等を記入。
- ・ 履修登録期間内(4/16~4/20)に、学内端末からWEB履修登録をすること。
(入力の際、科目コードを間違えないように!) <http://masis.sao.fukui-u.ac.jp/fukudai/login.html>
- ・ 履修一覧表及び履修計画表に指導教員・専修主任の印鑑を押してもらい、大学院係へ提出(期間厳守のこと)。
- ・ 受講登録用のIDとパスワードは、WEB履修登録に必要なになるので、無くさないように十分に管理をすること。
- ・ 指導教員の指導の下、計画的に履修して下さい。
- ・ 出来るだけ、1年次で26単位取得を目指してください。(後で修士論文の指導等を受ける場合に、スケジュール的に厳しくなることが予想されるため)

教職免許について

重要：専修免許取得を目指す人は、別紙「教員免許状取得について」を必ずよく読んでから、履修計画を立てること(特に教科教育専攻の人)。これを無視して履修登録した場合、最悪、専修免許の申請に必要な単位が不足することがある。

- ・ 大学院学則第40条及び別表3に留意のこと。
- ・ 教員1種免許の既取得者が、大学院で教育職員免許法等に定める所定の単位を修得すると、専修免許の所要資格を取得できる。
- ・ 以下の点に注意(特に教科教育専攻の学生)。
* 博物館学は専修免許の所要単位に含まれない。
* 教科教育専攻の各専修の教科に関する科目のうち、“科教育”の分野の科目は、専修免許の所要単位に含まれない。

(事務局資料)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水 準)

期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

学校関係者の期待に応えるため、教員としての専門的力量形成に係る理論的研究と実践的研究を適切に組合せ、特に実践研究においては学校との連携を重視した授業を展開するなど学習指導方法を工夫している¹⁾。

¹⁾資料 2-1-1：学校教育専攻・学校改革実践研究コースの教育課程：P11

資料 3-1-2：学校改革実践研究の取組と報告書：P20-21

e-ポートフォリオシステムなどの情報設備や図書等の環境整備に努めるとともに、適切な履修指導と学習時間の確保等の単位の実質化への十分な配慮を行っている²⁾。

²⁾資料 3-2-5：オフィス・アワーの設定：P25，

資料 3-2-6：教育学研究科オリエンテーション資料(抜粋)：P25

研究集会や教育支援活動への参加を促し、主体的に実践力を身につける機会を多く設けている³⁾。

³⁾資料 3-2-1：ラウンドテーブル・研究集会への参加：P22

資料 3-2-2：S P Pにおける教育支援活動：P24

分析項目 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 4-1 学生が身につけた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

大学院在籍者のほとんどが修学期間内に必要な単位を修得し、さらに高度な専門知識が要求される修士論文の審査に合格して教育学修士の学位を取得している。修了者は教員に要求される各分野の専門的識見を十分に身に付けている【資料 4-1-1, 別添資料 4-1 : P40】。

資料 4-1-1 大学院生の修了状況

	専攻	2年在籍者数	修了者数
平成16年度	学校教育専攻	10	9
	障害児教育専攻	7	7
	教科教育専攻	36	29
	計	53(3)	45
平成17年度	学校教育専攻	15	14
	障害児教育専攻	5	5
	教科教育専攻	27	25
	計	47(2)	44
平成18年度	学校教育専攻	21	20
	障害児教育専攻	3	1
	教科教育専攻	28	28
	計	52(2)	49
平成19年度	学校教育専攻	9	9
	障害児教育専攻	12	8
	教科教育専攻	27	26
	計	48(5)	43

()内は、長期履修生を示す。内数。

(外部評価のための資料, 平成 19 年)

学校改革実践研究コースでは、拠点学校における授業実践の展開を修士論文としてまとめ、「学校改革実践研究報告」として公表している。その内容は大学院生が身に付けた高い水準の実践力を示すものであり、学会誌等でも取り上げられ評価されている【資料 3-1-2 : P20】。

大学院生及び修了者の優れた実践研究成果は、教育実践総合センターの紀要『福井大学教育実践研究』をはじめとする教育関係雑誌で公表されている。これらの成果は大学院教育で培われた教育実践力を示す証左である【資料 4-1-2 : P28】。また、修了者のほとんどが、小学校教諭、中学校教諭、高等学校教諭、特別支援学校教諭、幼稚園教諭の各専修免許のうち複数の免許を取得し、力量を備えた教員として教職に就いている【資料 4-1-3】。

資料 4-1-3 専修免許取得状況

	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
幼稚園教諭専修免許	1	2	2	2
小学校教諭専修免許	21	15	24	14
中学校教諭専修免許	24	19	28	18
高等学校教諭専修免許	24	22	38	19
特別支援学校教諭専修免許	4	3	2	5
計	74	61	94	58

(基礎資料)

資料 4-1-2 現役大学院生及び修了者の研究論文等

「福井大学教育実践研究」に掲載された、現役大学院生及び修了者の論文（単著又は筆頭執筆）
第29号（平成16年）

- 相馬理恵「高校生における美術の存在意義と自由課題の果たす役割」
- 高間晴彦「教室での文学作品の読みの形成過程」
- 反中亜弓「『キレる』子どもの怒りに関する研究」
- 菅原伸泰他「課題学習の意味と役割に関する一考察-見本あわせ状況における知的に重い障害のある幼児の形の学習から」
- 板垣英一「学びの交流と発信活動を通じた地域学習の展開」
- 森坂泰昌「協働で探究する情報教育の在り方」
- 木本茂「自分たちがつくる実験を通して電気概念を学んでいく授業」
- 向当誠隆「福井県の発展策を追究する授業実践～多面的に政治を捉える～」
- 牧田秀昭「空間認識力を培う、他者に形を伝えることを主題とした単元構成」



第30号（平成17年）

- 横山純子「児童の表現意欲を高めるための鑑賞のあり方について」
- 酒井郁美他「教科書における動物の挿絵の存在意義-低学年の教科書に注目して」
- 濱田典子他「小・中学校におけるソーシャル・スキル・トレーニング実践の現状と課題」
- 脇本裕之他「小中学校と大学を結ぶ算数・数学の授業づくり-テレビ会議システムを利用した授業実践」
- 山口博功他「精神科病棟の入院患者に対するSocial Skills Training」
- 板垣英一「小学校における歴史入門学習」
- 高間春彦「教室での文学作品の読みの形成過程」
- 木本茂『実験を構築し、実際に経験することで確かな概念を身につけていく授業』
- 向当誠隆「古代国家の成立過程を聖徳太子の理想国家像から探究する授業実践」
- 高間春彦「国語科における本質的な問いによる文法の学習」
- 竹澤宏保「学びの概念を獲得しながら、電球の明るさの秘密を探究する授業実践」
- 永田賀保「地方自治の在り方を考える地域社会参加型の授業実践」

第31号（平成18年）

- 朝倉俊輔「木育男の美術教育における創造性に関する考察-中央中学校の実践と創造美術運動から」
- 田中恵理子他「坂井地区における気がかりな子どもを抱えた担任の悩みについて」
- 板垣英一「学びの交流を取入れた社会科学習」
- 森坂泰昌「学びのプロセスを作品化する情報教育-オリジナルマニュアルでインターネットの謎を解く(1学年)-」
- 永田賀保「政策評価や政策作りを通して、政治参加への意欲を高めるための授業実践-今、福井市に何が必要か?合併後の福井市を考えるから-」
- 向当誠隆「協働探究による視点の広がりや深まりをめざす授業実践-江戸幕府の長期政権の謎を探る社会科学習-」
- 竹澤宏保「東尋坊付近の地史を協働探究する授業実践-広がりのある時間的、空間的概念を育むことをめざして-」
- 木本茂「歴史的な科学研究を調査し、実際に授業で再現する探究活動」
- 森坂康昌「過去の経験を活かし個を支える協働のプロジェクト-家庭生活に役立つものづくりをしよう-」

第32号（平成19年）

- 朝倉俊輔「木育男の自由で生き生きとした学校づくりの実践-設立当初の福井大学附属養護学校での取り組み」
- 田中裕人「PISA調査からみた算数・数学の教科書の調査研究-PISA型の数学的リテラシー向上を目指す授業改善のために」
- 安居幸恵「数学する」生徒の育成をめざす授業の提案」
- 細谷佳菜子「児童生徒の服装に対する意識と着装行動」

教育専門誌に掲載された、修了者の論文

(平成16年)

- ・高間春彦「指導と評価の一体化」を越えて、『授業研究21』明治図書
- ・竹澤宏保「学びのストーリーを大切に、身近な自然を探究する能力を高めるための授業実践」『理科の教育』東洋館出版
- ・木本茂「電球の明るさの謎からフィラメントづくり」『理科の教育』東洋館出版社
- ・牧田秀昭「2年課題学習」「3年平方根」青山庸編著『多面的にもものを見る力、論理的に考える力を育てる数学の授業』東洋館出版社
- ・木本茂「自分たちの手で実験をつくり、化学を探究する」秋田喜代美編『子どもたちのコミュニケーションを育てる』教育開発研究所
- ・牧田秀昭「探究するコミュニティとしての中学校づくり」秋田喜代美編『子どもたちのコミュニケーションを育てる』教育開発研究所

(平成17年)

- ・竹澤宏保「中学2分野の年間計画 どうな発展学習をどう入れるか」『楽しい理科授業』明治図書

(平成18年)

- ・永田賀保「キャプテンを決めよう」『N法(0)を教える身近な題材で基礎基本を授業する』明治図書 (2006.7)
- ・向当誠隆「マンション建設を変更する解決案をつくらう」『“法”を教える 身近な題材で基礎基本を授業する』明治図書 (2006.7)
- ・向当誠隆「戦後日本経済の発展」と「国民生活の変化」でちよい年表づくり』『社会科教育』12月号 明治図書 (2006.12)
- ・向当誠隆「見通しを持って調べよう! -自分の説をより確かなものにするために-」『社会科教育』2月号 明治図書 (2007.2)

(福井大学教育実践研究, 外部評価のための資料, 平成19年)

観点 4-2 学業の成果に関する学生の評価

(観点到に係る状況)

平成 18 年度実施の「大学院修了者の学業成果の到達度と満足度を示す調査」において、専門教育のカリキュラム(科目や履修方法)は適切であったか、学業の面で自己の目指していたものを達成できたか、指導教員の指導は適切であったか、大学生活を通して自信を持って社会へ船出して行ける何かを自分の中に築けたように思うか、福井大学で修学したという事実は自己の生涯を通じて意味をもつことになると思うか、などの学業に関する問に対して、修了者は 5 段階評価で平均 4 以上の評価をつけている。これらの結果は修了者が学業に対して高い満足感を持ち、身に付けた資質・能力に自信を持っていることを示すものである【資料 4-2-1】。

資料 4-2-1 修了者の達成度認識と満足度

教育地域科学部・教育学研究科評価委員会が平成 19 年 3 月に実施した「学部卒業生・大学院修了者の達成度認識と満足度アンケート」結果(教育学研究科修了者の結果を抜粋)。

アンケート項目

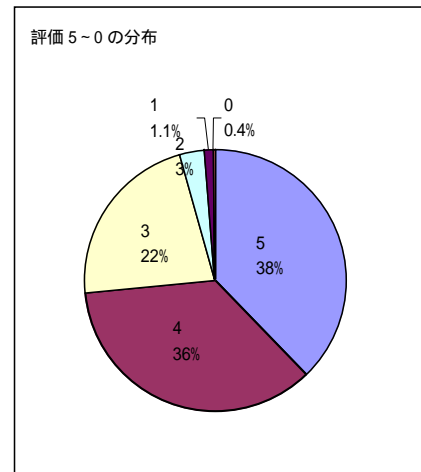
下記の質問に当てはまる番号に を付してください。
(強くそう思う。 そう思う。 どちらともいえない。 そう思わない。 まったく思わない。)

- 1 福井大学入学時に思い描いていた大学生活を基本的におくることができた。()
- 2 学業の面で、自己のめざしていたものを基本的に達成できた。()
- 3 専門教育のカリキュラム(科目や履修方法)は適切であった。()
- 4 助言教員・指導教員は親身であった。()
- 5 就職支援はおおむね満足いくものであった。()
- 6 在学中、友人・先輩等ととても得難い人間関係を築くことができた。()
- 7 自信をもって社会へ「船出」していける何かが自分の中に築けたように思う。()
- 8 在学していた間で、それなりに「自分探し」ができたように思う。()
- 9 教育研究環境はおおむね満足いくものであった。()
- 10 福井大学で修学したという事実は自己の生涯を通じて大きな意味をもつことになると思う。()

教育学研究科修了者の回答分布(10 項目の平均点: 4.01)

問番号	評価	回答数	合計点	平均点
1-	5	9	45	4.00
	4	11	44	
	3	6	18	
	2	0	0	
	1	1	1	
	0	0	0	
2-	5	8	40	4.11
	4	14	56	
	3	5	15	
	2	0	0	
	1	0	0	
	0	0	0	
3-	5	5	25	3.89
	4	14	56	
	3	8	24	
	2	0	0	
	1	0	0	
	0	0	0	
4-	5	19	95	4.44
	4	2	8	
	3	5	15	
	2	1	2	
	1	0	0	
	0	0	0	
5-	5	4	20	3.23
	4	4	16	
	3	13	39	
	2	4	8	
	1	1	1	
	0*	1	1	
6-	5	16	80	4.48
	4	8	32	
	3	3	9	
	2	0	0	
	1	0	0	
	0	0	0	
7-	5	10	50	4.11
	4	11	44	
	3	5	15	
	2	1	2	
	1	0	0	
	0	0	0	
8-	5	9	45	3.89
	4	13	52	
	3	5	8	
	2	0	0	
	1	0	0	
	0	0	0	
9-	5	8	40	3.81
	4	10	40	
	3	6	18	
	2	2	4	
	1	1	1	
	0	0	0	
10-	5	14	70	4.37
	4	9	45	
	3	4	20	
	2	0	0	
	1	0	0	
	0	0	0	

*0は回答なしの場合



(外部評価のための資料, 平成 19 年)

現職教員の院生が、在学中の授業や様々な実践交流への参加を通して優れた経験を学ぶことで、省察的实践や記録の意味を理解するようになって来ている。また、詰込型の授業から探究する授業への転換を学習者とともに作り出していく成果も生まれるなど、これらは、大学院での顕著な学習の成果を示している【資料 3-2-1 : P22, 資料 5-2-1 : P31】。

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

修了者は、大学院教育を通じて各分野の専門的識見と高度な実践力を身に付け、専修免許を取得して地域の教育に貢献している¹⁾。

¹⁾資料 3-1-2：学校改革実践研究の取組と報告書：P20-21

資料 4-1-2：現役大学院生及び修了者の研究論文等：P28

資料 4-1-3：専修免許取得状況：P27

資料 5-1-1：教育学研究科修了者進路状況：P30

意識調査の結果として、修了者は大学院で受けた教育に満足し、修学が自身のキャリア・アップにとって有意義なものであると捉えている²⁾。これは大学院教育が関係者としての大学院生の期待に十分に込えている証左である。

²⁾資料 4-1-1：大学院生の修了状況：P27

院生や修了者の論文を、教育実践総合センター紀要「教育実践研究」に載せたり、学校改革実践研究コースの修士論文を「学校改革実践研究報告」として公表するなど、研究成果を公表する機会が少ない教員にその機会を提供していること、さらにはこれらのうちの少なくない論文が研究誌に掲載されたり引用されるなど高い評価を得ていることは、院生や修了者の期待に十分に込えていることを示している³⁾。

³⁾資料 3-1-2：学校改革実践研究の取組と報告書：P20

資料 4-1-2：現役大学院生及び修了者の研究論文等：P28

分析項目 進路・就職の状況

(1) 観点ごとの分析

観点 5-1 修了後の進路の状況

(観点到に係る状況)

大学院修了者のうち毎年9割以上が進路を決め、就職または進学している。現職教員・社会人の大学院修了者を除く新規就職者のうち非常勤講師も含めた教員、カウンセラー、学芸員、スポーツインストラクターなど専門職に就いた者は過半数に達している【資料 5-1-1】。

教員志望者のほとんどは、福井県内において教職(非常勤講師を含む)に就いているが、毎年1名から2名の者は県外で採用されている【資料 5-1-1】。

資料 5-1-1 教育学研究科修了者進路状況

		平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
修了者数		45	44	49	43
修了者の進路	教員(現職)	12	19	16	9
	社会人(現職)	0	2	2	3
	教員採用 ()内は県外採用・内数	3(1)	2(1)	4(2)	2(1)
	非常勤講師	9	9	14	18
	カウンセラー・スポーツインストラクター・学芸員	5	3	2	0
	公務員採用	2	1	1	0
	企業就職	7	4	6	9
	進学	4	0	1	1
	留学生帰国	2	1	2	0
	その他	1	3	1	1
修了者に対する進路決定率		93.30%	90.10%	93.90%	97.70%

(基礎資料)

現職教員は、派遣研修制度や夜間主の制度を活用し入学しているが、修学後は、その多くが学校での教育研究のリーダー的な役割を果たし、大学院の使命と学校側の要請に

えている。例えば、夜間主・学校改革実践研究コースでは平成 16 - 19 年度に小中高等学校の現職教員が 14 名修了しているが、このうち教務主任・研究主任に就いている者は 8 名で 6 割近くに上る。またこの間医療技術系専門学校から 11 名の修了者を出し、平成 18 年 4 月の短期大学移行に伴う、教員資格審査やカリキュラム改善に貢献した【資料 5-1-2】。これらのことは、教育の効果が十分に上がったことを示している。

資料 5-1-2 夜間主・学校改革実践研究コース修了者とその後の校務

修了年度	修了者数	附属学校 勤務	公私立小 中高勤務	医療技術 専門学校 勤務	修了後の校務(昇任等) 平成19年度時点(医療技術除く)
平成16年度	4	2	2	0	教務主任1・研究主任1(計2名)
平成17年度	9	3	2	4	教務主任1・研究主任2(計3名)
平成18年度	9	2	1	6	校長(私立高)1・教頭1・研究主任1 (計3名)
平成19年度	4	1	1	2	-
計	26	8	6	12	教務主任2・研究主任4 校長1・教頭1(計8名)

(基礎資料)

観点 5-2 関係者からの評価

(観点に係る状況)

学校教育専攻・夜間主・学校改革実践研究コース平成 18 年度修了者に対し聞き取り調査を行った結果、ラウンドテーブルや夏の集中、さらには修論の取組など、このコースで受けた教育について高い評価を得た【資料 3-2-1 : P22, 資料 5-2-1, 資料 5-2-3 : P33】。

資料 5-2-1 夜間主・学校改革実践研究コース修了者聞き取り調査(抜粋)

Sさん

Q: 夏の集中講義で得られたことは?

でも悩んだだけ、つらい思いした分だけは、得たものはあった。後付けの仕方とか。でもそれもすごく大事なことだというふうに勉強できた。後付けていうのはこういうことをいってこういうふうな視点で見ていき、自分のそのときだけの感情とか、自分だけの思いとか、そのときだけの思考じゃないと思った。ここから、もう一回考え直すことであり、書き手の人がどういうふうに通い込まれた流れになっているのかという視点を今まで考えたことがなかった。その大切さってというのは夏の集中で得られた。得たものは大きかった。選ぶ実践が多すぎて、時間内では選べず、また、選んだものも思っていた内容と違うこともあった。またそれが、違った視点で書けば良かったのかもれない。

Q: 修論を書いていて考えが変わったことはないですか?

今まで長い目で見ていくというか、1人の学生を見ていくってことを考えたことがなかったので、先輩のラウンドのまとめたものを聞いて、そういう視点が大事なのだという思いから、1人の中にもいろんな変化があるんだってということがわかるようになった。短いスパンっていうのは実際自分がかかっているところだから、短いスパンにも変化があるんだって思うようになって伊藤さんの(論文)がある。変化を兆していく中には土台に省察が大事なんだ、リフレクションが大事なんだっていう考えが理解できるようになって、リフレクションできる環境を私たちは、作っていかねばならないと思った。初めは、カンファレンスだけだった。カンファレンスで自由に話し合って自分を振り返るし、私たちはあまり入らずに話を(学生で)してくれればいいという感覚でやってきた。その影響で学生の反応がすごく大きくて、すごくいろんなことを話し合えたり、人の意見もわかったという反応も得られた。リフレクションできる環境を整えるために、走ってきたという感じ。リフレクションと省察の大切さが見えてきたら、次から次へとやることが見えてきた。まだまだ環境を整えることを考えていかなければならない。ライフサイクル、時間というものを考えたときに、私たちの対象というのは長い人生、生きてきた人たち。その人たちのライフサイクルを考えないカンファレンスはありません。人が生まれて、最後の段階にかかわる役、終末期だから。だから、縁があって受け持った患者さんのライフサイクルをみんなで考えていく。どういうふうに成長を遂げてきて、今最後の段階にあるんだって言う、そういうことをひもといいて大切さという、カンファレンスなりをしていきたいと考えている。だからもう一個上の段階。まだまだ考えていけば深くなって、学生の実践力の育成にもつながっていくのかなって思う。

Iさん

Q: 修士論文を書いてみてどうでしたか?

書いてみて思ったことは、(修論の)最後のところにもあるんだけど。意義は見出せたかな、省察すると研究の意義は見えてきたかな。やってて間違いは無い、大切なことかな。そのやり方研究の進め方はちょっとわかんないと思うけど、学校でこれを研究として進めていくときにどうやって進めていったらいいやろうかっていうのは漠然としてるし、附属小学校の先生らも低中高でやっていることが違うから。それが形にできないかなと。ただ意義はあると思う。振り返ることで自分の成長が分かったって言うのが一つと、やっぱりもう一度考える。省察して書いたつもりなんやけどもう一回省察して考える自分が居たりとか。振り返ることの大切さを分かったかな。

Jさん

Q: 「今までの集中講義でやってきたこともそういうことですよ。」

そう。サイクルあるじゃないですか。発意、構想・・・とかね。そういうの全部かかってくるんだって。つくづくなるほどなって思いながら、やっぱり自分で考えて自分で書いて、自分で発表して、そこからまた自分が考えるっていうのは本当に、このサイクルなんだってつくづく思いながら。

Fさん（医療専門学校教員）

Q：教育ってということに対しての考え方についてはどんな風に変化されてきましたか？

冒頭でも言ったように、僕自身教育のきよの字も知らなかったのでもんなえらそんなことは言えないんですけど、ただ僕なりの教育ってというのは互いに教え教えられてというのが教育かなって思ってたんですね。それが色濃くなりました。完全に対等とまではいけないでしょうけど、ある程度対等な立場にいないといけないのかなって、上から下っていうのはできないなって分かりましたし、実際に福井大学の4人の先生方はそれを地でいっているなという思いがありましたので、すごくやりやすかったですね。

Q：ご自分が学生の立場に立たれて実感できたっていうのが...

そうですね、同じ視点で考えてくれるっていうのは大きかったですね。

Q：思ったこととかそのまま言いやすいですね。

やっぱり、それをすべきなのかなって、教育者っていうのは、学生さんが思っている思いっていうのをいかに素直に出させる環境を作ってあげるかっていうのが大きいんだらうなって。

（福井大学大学院教育学研究科学校改革実践研究コース『専門職の力量形成と専門職大学院 - 大学院学校改革実践研究コース修了者聞き取り調査の記録 - 』平成 19 年 3 月）

教職に就いている修了者及び管理職に対して聞き取り調査を行った。その結果、大学院でのインターンシップの経験が今の教員生活に役立っているなど、大学院教育の果たす役割について高い評価を得た【資料 5-2-2】。

資料 5-2-2 修了者及び関係者からの聞き取り調査（抜粋）

平成19年12月3日 横浜市立G小学校 平成18年度修了生 Gさん（学校教育）

Gさん

大学院のインターンが良かった。自分で学級運営したわけでもないのに違いますが、いろんな授業を観てきたことが良かった。2年目の先生も同じ学年にいるが、インターンの経験は強いねと言われている。しかし良い授業をいっぱい観ても、とりあえず指導案通りしかできず、こなすだけで精一杯。

求められる教師の力としては、マネジメントの力だと思う。授業のマネジメントは、皆で話し合っていていい答えを出してきてたりしたなと思ったりしても、必ずしも皆がわかっている訳ではなかったということもある。いつか45分の細切れではなく、つながっていく授業ができるといいと思う。（そうしたことができるように）卒論とインターンで学校に行ったことは良かった。ただインターンのときは、その先生その先生でやり方があるので、どうしてそうしたのか、本当はこうすればいいんだよ、というようなことを聴く機会があればよいと思う。教育実習のときは、教師は実習生を教えるという問題意識があるが、インターンのときは講師よりの立場なので、先生の方から言えば、手伝ってということになりがちなので。

（学部・大学院教育の課題）もっとどの教科も実践記録を読んでも良いなと思う。

副校長

とても落ち着いて頑張っている。若い教員を育てるとき、横浜の地域はたくさんあり、地域に対応できること、それは子どもを知ることであり、それが大事だと思う。それを大学で培うのは難しいので、大学では芽を育て、あとは教員になった後、保護者の要求も違うので、それを肌で感じて自分なりに組み立てていくことが大事だと思う。

大学院での教員養成の課題としては、クラスに取り込めない子が多くなってきている。そうした子を、どうクラスに入らせるか、どう他の子と関係づくりをするか、それをどう保護者に伝えるか、親とのコミュニケーションをとり、一緒に関係をつくっていくような課題について考えて欲しい。

（卒業生・修了生調査報告書，平成 19 年 12 月）

資料 5-2-3 インターン経験者のコメント

平成17年度修了生 S.M.さん（附属小学校）

私の場合、小学校での授業参観を中心にして、時間がある限り中学校にも行って授業を見せてもらうという形をとらせてもらった。活動は、週5日で、期間は4月の終わりごろから、3月の中ごろまで。活動日の5日のうち3日は終日、残りの2日は午前や午後の半日だけ附属学校にいて、残りの半日は大学で講義やゼミということが多かった。授業に関わったのは、小学校は3、4年、中学校は2年生で、参観した授業はほとんどが理科の授業であった。理科の授業の他にも、偶然空き時間だったこともあり生活科の授業にも継続して関わらせてもらうこともできた。また、運動会や遠足や宿泊学習(附属小学校では、学団活動と言われている)にも参加させてもらうこともできた。

こうしたインターン活動で、私なりによかったと感じていることは、大きく2つ。一つは、授業をさせてもらったこと。それも、ただ授業をするというだけでなく、担当の先生が自分の授業を見てアドバイスをくれたり、授業づくりのサポートをしてくれたりしたことは、日々授業を行う講師や教員の立場では経験できなかったことだと考える。しかも、年間の授業を定期的にするわけではないので、ひとつの単元を終えたらまた授業参観に戻ることになるので、担当教員の授業を見ながら自分の行った授業を振り返り、今度は違った角度から授業を見ることができるようになったように思う。自分が授業をし、再び担当教員の授業を見せてもらうことで、自分が抱いていた研究課題を現実を通して考えることができ、単なる理想ではなく、現実に即した研究課題として持つことができることにつながったと感じている。また、このインターン活動で見てきた授業を先行事例として、今年度授業を行うことができたので、本を読んで考えたことだけではなく、自分が実際に見てきた中で得た感触をいかして、自分の授業を組み立てることができたのは大きかった。

もう1つは、授業だけでなく、日常的に学校にいて授業と授業の間や放課後の様子、行事や研究会の前後の様子を身をもって体験することが大学院生の間にできたことは、今後の教育活動に多いにプラスになった。丁度、大学生でいることと学校へ勤めに行くことの間にある移行期間を過ごすことができたように思っている。おかげで現在もインターンを行った附属小学校で、講師としてお世話になっているが、この1年を終えて振り返っても、学校の様子や生活のリズムや年間の行事の流れ方などで戸惑ったりすることなく、初めて現場に来た人に比べて柔軟に対応することができたように思う。

平成18年度修了 S.N.さん（附属小学校）

インターンシップを行っての感想は、非常に充実した1年間であったということだ。インターンシップは教育実習やライフパートナーなどの実践とは異なり、長期に渡って継続的に活動を行うので、学校というものを全体を目の当たりにすることができる。教育実習で大学生が携わることができるのは、授業を中心としたほんの一部であり、教師の仕事というのはそれ以外にも山ほどある。職員会議や職員朝礼、学校行事の運営、電話の取り方、保護者への対応など、教育実習では経験することのできなかったことを、インターンシップを通して学ぶことができた。このようなことを実際に教育現場に出てから学ぶのと、インターンシップ生として事前に学習するのでは大きな差がある。誤解を生むかもしれないが、インターンシップ生はまだ学生であると許容される面が少なからずあると思う。それを活かして、失敗を恐れずに何事も思い切ってやってみることもできるし、わからないところは素直にわからないと言える。インターンシップの中で学んで得たことが、実際に教師として勤務するときに即戦力として活かされるように思う。これは授業や生徒指導においてだけでなく、教師同士の人間関係や雰囲気、礼儀など、教師同士が仲間としてうまくかかわるために必要なことも含まれる。教師も人間なので一人ではどうしようもないこともある。不安や心配など悩み事もある。それを分かち合うことができる円滑な人間関係がとても大切である。それもインターンシップを行って学ぶことができた。

平成18年度修了 B.Yさん（附属小学校）

インターンシップ生として附属小学校で活動してみて、授業の見学・実践だけでなく、学校運営に関わる様々な内容についても携わることができ、本当に充実した日々を送ることができました。

専門教科である造形に関しては、低学年の3クラス（1年生1クラス・2年生2クラス）、中学年の2クラス（3年生・4年生各1クラス）を年間を通して参観、及び授業を実践する機会を得ました。4月当初は、自分のやりたいこともまだ定まっておらず、受け入れる先生方もどのように働きかければよいのか解らないといった様子でごこちない感じでしたが、見学した授業について自分なりの授業記録を作成し、先生とのやりとりを繰り返すうちに、自然と授業について話をする機会も増えていきました。また、自分が行った実践についても先生が見てくださるようになり、アドバイスをいただくことで、自分なりに手応えが感じられるようになっていきました。後期になると、修士論文に向けて自分の追いかけていきたいことも徐々に明確になり、修士論文で取り上げる低学年については授業の参観を主とし、中学年についてはTTに近い形でクラスに入り、日常的により深く子どもたちと関わるできるようになりました。子どもたちと1年間という長いスパンで関わることで、教育実習の短期間では感じ取ることのできなかった子どもたちの確かな成長を、生身で実感することができました。修士論文で取り上げたクラスについては、インターンシップ活動後も参観を続け2年間にわたって観察することで、より長いスパンでの個々の成長を捉えることができたと思います。

（卒業生・修了生調査報告書，平成19年12月）

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準)

期待される水準を大きく上回る

(判断理由)

大学院修了者(現職教員・社会人を除く)のうち9割以上が進路を決め、非常勤講師も含めた教員、カウンセラー、学芸員、スポーツインストラクターなど専門職に就いた者が過半数に達している¹⁾ことは、大学院生の期待に込えていることを示している。

¹⁾資料 5-1-1: 教育学研究科修了者進路状況: P30

修了者から大学院教育の内容や方法について高い評価を得るとともに、勤務校の管理職からも修了者が高い評価を得ている²⁾ことは、関係者の期待に十分に込えていることを示している。

²⁾資料 3-2-1: ラウンドテーブル・研究集会への参加: P22

資料 4-1-2: 現役大学院生及び修了者の研究論文等: P28

資料 5-2-1: 夜間主・学校改革実践研究コース修了者聞き取り調査(抜粋): P31-32

資料 5-2-2: 修了者及び関係者からの聞き取り調査(抜粋): P32

資料 5-2-3: インターン経験者のコメント: P33

質の向上度の判断

事例1 実践的力量形成を支える教育課程(分析項目)

(質の向上があったと判断する取組)

学校関係者の期待に込えて、附属学校との協力関係の下に、実践研究を中心に据えた「教育実践研究」を必修科目とする教育課程を編成している。特に夜間主・学校改革実践研究コースでは、コアカリキュラムとして学校拠点の協働実践研究(学校改革実践研究～)を設け、教員の実践的力量形成のための高い水準の教育を実施している¹⁾。夜間主・学校改革実践研究コースの取組みは、平成17・18年度「大学・大学院における教員養成推進プログラム」に採択されるなど高い評価を受けた。またこの取組みの成果は、平成20年度設置の教職大学院のモデルとされた。以上より、これらの取組みは評価期間を通じて高い水準を維持していると言える²⁾。

¹⁾資料 2-1-1: 学校教育専攻・学校改革実践研究コースの教育課程: P11,

資料 3-1-2: 学校改革実践研究の取組と報告書: P20-21

²⁾資料 4-1-2: 現役大学院生及び修了者の研究論文等: P28,

別添資料 2-1: 教職開発専攻(教職大学院)設置構想: P38

事例2 インターンシップ制度の導入とその成果(分析項目 ,)

(質の向上があったと判断する取組)

大学院生の期待に込えるために、附属学校において直接教育活動に関わる「インターンシップ制度」を平成17年度から導入した³⁾。この制度は法人化後新たに設けたもので、大学院生の実践力向上に効果的であると修了者から高く評価され、平成20年度設置教職大学院の長期インターンシップ制度にも結びつく成果をあげている。法人化後大学院教育において著しい質の向上があったものと判断される⁴⁾。

³⁾資料 2-2-3: 附属学校におけるインターンシップ制度: P16

⁴⁾資料 3-2-1: ラウンドテーブル・研究集会への参加者: P22-23

資料 5-2-2: 修了者及び関係者からの聞き取り調査(抜粋): P32

資料 5-2-3: インターン経験者のコメント: P33

別添資料 2-1: 教職開発専攻(教職大学院)設置構想: P38

事例3 教育内容・方法の改善のための取組（分析項目）

（質の向上があったと判断する取組）

平成14年に学部FD委員会が組織されてから毎年「FD研究会」を開催してきた。法人化後の平成18年度以降は他学部のFD委員会と共催で研究会を開催し、全学的な視点で効果的なFD活動を推進してきた⁵⁾。さらに平成18年度からは、研究科主催の「教材開発研究会セミナー」の定期開催及びワークショップ・シンポジウムを企画するなど、FD研究会以外にも適切な研修機会を設けている⁶⁾。これらのFD活動状況及び授業改善状況は平成19年度実施の教員の評価にも反映され⁷⁾、また、授業改善の効果は修了者の学業に対する満足度にも表れている⁸⁾。以上より、教育改善の取組は法人化後質の向上があったと判断される。

⁵⁾資料1-2-1：FD活動状況と報告書：P7

⁶⁾資料1-2-4：教材開発研究会活動状況：P9

⁷⁾資料1-2-3：教育活動評価基準：P8

⁸⁾資料4-2-1：修了者の達成度認識と満足度：P29

事例4 現職教員及び社会人等の就学を支援する体制（分析項目）

（質の向上があったと判断する取組）

社会人の就学を支援する夜間主コースを平成14年4月に設け、大学院設置基準第14条特例を適用する柔軟な履修を可能にした⁹⁾。これにより現職教員の再教育という社会的要請に応えるとともに、法人化後の平成18年度からは、大学院長期履修制度を利用した「教育職員免許取得プログラム」を導入し、他学部出身者にも教職への道を開いた。平成18年度は3名、平成19年度は4名の入学者がこのプログラムを利用しており、法人化前にはなかった成果を上げていて、質の向上があったと判断される¹⁰⁾。

⁹⁾資料1-1-2：夜間主コース，教育方法の特例，長期履修学生に関する規程：P4

資料1-1-8：夜間主コース入学者数：P6

¹⁰⁾資料2-2-1：教育職員免許取得プログラム実施状況：P15

学部・大学院の充実に向けての取組

教育地域科学部(及び大学院教育学研究科)の将来構想や、現在の諸問題に対処するために設置されたいくつかの委員会の活動について以下に述べる。

(1) 教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会

平成16年4月の法人化は学内諸組織の体制と性格をそれまでとの対比において根本的に変えることになった。そうした流れに対応できるように、「人事、財政、企画等の観点から必要となる教育研究組織の改革について審議する」委員会として平成16年6月11日に設置されることになったのが、教育地域科学部教育研究組織特別委員会(以下、特別委員会と略称)であった。特別委員会は精力的に活動し、翌年平成17年4月5日、教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会、同評価委員会、同研究・学外連携推進委員会、同カリキュラム委員会等の設置を実現させたことで役割を終え、みずから創出することになった教育地域科学部及び大学院教育学研究科企画委員会(以下、本委員会と呼ぶ)へ、「学部及び研究科の将来構想について検討する」教育地域科学部・教育学研究科構想検討委員会(平成16年4月～)と並んで吸収され消滅した。以後、教育地域科学部及び大学院教育学研究科の将来構想は本委員会を軸に展開していくことになる。

本委員会の構成は、学部長、学部選出の評議員3名、附属教育実践総合センター長、定組委員会委員長、学部教務学生委員会委員長、教授会選出の教員4名、以上以外に学部長が指名する学部の教員若干名で構成される。

その間、平成16年10月8日教授会において学部長から、平成16年9月22日開催の日本教育大学協会臨時会議で文科省から専門職大学院構想が検討されていることの説明があった旨の報告がなされ、今後は、特別委員会の中にワーキンググループを作って具体的な検討をおこないたいとの付言があった。そして早くも10月21日には専門職大学院等検討ワーキングが設置され活動し始めた。そうした中で、専門職大学院はそれのみ単独で設置されるというものではなく、残る既存の大学院や学部の再編・整備も条件であるということが明らかになってきた。そこで、本委員会の下に、専門職(教職)大学院設置を目指す方向で、その実現に必要な条件を整えるために平成18年3月3日以来、タスクフォース小委員会と銘打って教職カリキュラム充実小委員会、教育学研究科問題小委員会、新課程改革小委員会、教育実践総合センター小委員会、教職大学院カリキュラム小委員会、教職大学院人事・組織等小委員会(前掲・専門職大学院等検討ワーキングを吸収)の6つの小委員会が置かれてエネルギーに作業をつづけた。

平成18年に中教審答申が公表されるに至って教職大学院に関するディテールもますます明らかになる中で、平成19年に入るや、いよいよ概算要求をにらんで作業する段階へと移行することが求められた。すなわち、前のタスクフォース小委員会としての6小委員会を、やはり本委員会の下に今度は概算要求に係る組織として、学校教育課程改革小委員会、地域科学課程設置準備小委員会、教育学研究科改革小委員会、教職大学院設置準備小委員会という4つの小委員会に改組し、概算要求書作成の作業をすすめた。

その結果、本年6月文科省に、平成20年開設を予定して教職開発専攻(教職大学院)設置の概算要求書を提出し、既設大学院の改革(学校教育専攻・教科教育専攻)及び学部教育の改革(地域科学課程)に関しては事前伺いの書類を提出し、いずれも受理された。あとの二者については、事前伺いの結果が既に出たが、設置計画の内容に修正が必要とされる意見は付せられなかった。

今それらの内容をかいつまんで説明しておきたい。

教職開発専攻(教職大学院)の設置

創設意図は高度職業人としての教員の養成であり、教職専門性開発コースとスクールリーダー研修コーディネーター養成コースの2コース(各定員15名)から成る。学校で、学校の抱える課題を同僚教師と協働して具体的に解決する大学院。実践を省察・再構成し、世代サイクルを実現する大学院。学校間を超えて実践を評価できる大学院を目指す。コンセプトは、21世紀の知識基盤社会に生きる力を育て、子どもたちの生活と成長を支える、教師の実践力・組織力形成のために、学校拠点に教師の協働実践力を培う、である。

既設大学院の改革

21世紀の知識基盤社会に生きる力を培う学校教育をいかに実現していくか。こうした力を培うために学校改革と教師教育改革が求められている。それに応えるために既存の学校教育専攻と教科教育専攻について新しい教育課程を編成する。すなわち、学校教育を根本から問いそして支えるために、人間形成とそれを支えるコミュニティー(地域・社会・家族と学校)に関わる協働実践研究をコアとするのが新・学校教育専攻(定員12名)であり、PISAのリテラシーに象徴されるような実践的探究的な学力を実現するカリキュラムの開発研究をコアとするのが新・教科教育専攻(定員25名)である。

(外部評価のための資料。平成19年)

別添資料 2-1：教職開発専攻（教職大学院）設置構想

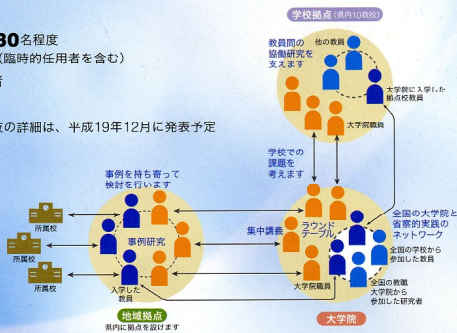
教職開発専攻(教職大学院)設置の目的

変化の激しい21世紀の社会を生きる子どもたちが、よりよく自己実現するために、学校には多くのことが求められています。家庭、地域、学校の連携で地域の教育力を高める必要があります。とりわけ学校においては、教員の専門的力量的向上と協働研究が重要になります。そのために福井大学は、21世紀の学校教育を担う教員の専門的力量的開発を目的として、教職大学院を開設します。

- 5つの特徴
1. 今日の課題に焦点を当てた協働研究を支援します。
 2. 15人の大学教員がチームでバックアップします。
 3. 大学教員は幼・小・中・高・特別支援の学校現場へ出向きます。
 4. 学校行事等に配慮した集中的な講座を開設します。
 5. 全国の教職大学院や優れた実践とつながります。

教育課程の概要

- 学位** …………… 教職修士（専門職）
※新しい学位の授与
- 修業年限** …………… 原則として2年（1年を許可する場合もある）
- 必要修得単位** …… 長期インターンシップ
共通科目、コース別選択科目
計45単位以上を取得すること
- 募集人員** …………… 入学定員 30名程度
現職教員（臨時的任用者を含む）
学部進学者
- 詳細** …………… 入学者選抜の詳細は、平成19年12月に発表予定



教育課程の特色

- **学校拠点の協働実践研究プロジェクト**
学校を拠点とし、学校が抱える課題に教員と研究者が協働して実践的な学校改革に取り組みます。
- **教職専門性の開発・発展を支援**
「実践力」「マネジメント力」「省察・研究能力」「理念と責任」の4つの軸で教育課程を構造化するとともに、世代交流のサイクルを新たに創り出していきます。
- **長期実践報告の作成**
修士論文は課せませんが、長期実践報告の作成と発表を行います。
- **1年間の長期インターンシップ**
学校の1年間のサイクルを経験し、授業づくり・学級づくり・生徒指導等を総体として実践的に学びます。
- **事例研究中心の共通科目**
「教育課程の編成・実施」「教科等の実践的な指導法」「生徒指導・教育相談」「学級経営・学校経営」「学校と教師の在り方」の5領域について、実践的なカンファレンス・事例研究を中心に学びます。
- **コース別選択科目**
「カリキュラム・授業改革」「成長・発達支援」「コミュニティとしての学校と教師の力量形成」の3つの系の中から1つを選択し、主題に沿って実践と研究を深めます。

教育課程の構成

教職専門性 開発コース	スクールリーダー 研修コーディネータ 養成コース*	学年履修単位（目安）	
		1年次	2年次
長期インターンシップ（10単位）		10単位	0単位
共通科目（20単位）		14単位	6単位
コース別選択科目（15単位）		2単位	13単位
合計（45単位）		26単位	19単位

※入学前に連携協力校等において共同研究の経験をするなど一定の要件を満たす者は、短期履修（1年）でも修了可とします。

■ 授業科目目録

共通科目目録

1. カリキュラムのデザインの実践事例研究（2単位）
2. 授業づくりの長期実践事例研究Ⅰ、Ⅱ（計4単位）
3. 児童生徒の成長・発達支援の長期実践事例研究Ⅰ、Ⅱ（計4単位）
4. 学校協働組織マネジメント（2単位）
5. 教師の実践的力量的形成の課題と実践（2単位）

※いずれの科目も
3、4人の教員が
チームで担当します。

コース別選択科目目録

1. カリキュラム・授業改革マネジメント 学校拠点長期協働実践プロジェクト（8単位）
2. 児童生徒の成長・発達支援 学校拠点長期協働実践プロジェクト（8単位）
3. コミュニティとしての学校と教師の力量形成 学校拠点長期協働実践プロジェクト（8単位）

（教職大学院パンフレット）

別添資料 2-2：既設大学院の改組計画の概要

学校教育専攻

学校教育が直面する諸課題は、学校の内部努力だけで解決できるものではなく、学校を支える地域との協働により解決の糸口を探る営みが求められています。学校教育専攻は地域を支えられた学校のあり方を実践的に学び、新しい地域-学校モデルを創生しようとする専攻です。

学校教育専攻の特徴

- 学校教育専攻の教育課程は、新たな学校教育の課題にかなう教職専門の資質と能力、これまでの障害児教育専攻で培ってきた、多様なニーズに応える学習支援を行う資質と能力、学校とそれを支える地域コミュニティの協働という三つの柱から構成されています。
- 学校を支えるコミュニティの再生と人間力を形成するために、必修科目「協働実践研究プロジェクト」において、子どもたちや家族の多様なニーズに応える見識と専門的力量、そして生涯学習、地域の文化振興、健康教育、環境教育、国際教育など、学校と地域の連携なくしては実現できない諸課題を体験的に実践研究します。
- 学校教育専攻は、学部からの進学者や地域との連携に関心を持った学校教員のみならず、地域の教育文化施設、健康福祉あるいは子育て支援施設、地方公共団体、企業、NPO等で活躍する人々を広く社会人学生として受け入れ、それぞれの職業的・専門的視点に立って学校教育を支えるコミュニティの在り方について実践的に学ぶことができる専攻です。
- 学校教育専攻では、教職専門のみならず、学校とそれを取り巻く地域についての深い理解をベースにして、①地域コミュニティによる学校再生に寄与できる教員と社会人、②多様な子ども達のニーズに応えられる能力を持つ教員を養成します。
- 学校教育専攻のカリキュラムは、再編後もこれまで通り「学校心理士」や「臨床発達心理士」等の資格取得が可能ないように作られています。

学校教育専攻の教育課程
(計30単位以上)

協働実践研究プロジェクト
教育を支えるコミュニティ形成

- コミュニティ学習支援
 - 特別支援コーディネータ
- (8単位)

専門科目

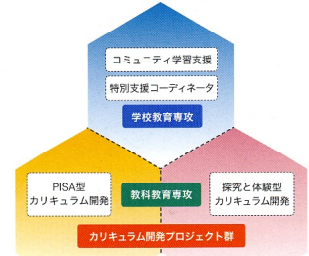
- コミュニティと人間
 - 学校コミュニティ
 - コミュニティ学習支援
- (計18単位以上)

課題研究(4単位)・修士論文

協働実践研究プロジェクトとは…

- 学校教育専攻と教科教育専攻では、1年前期から2年後期までの4期にわたって、協働実践研究プロジェクト(8単位必修)を履修します。
- プロジェクトには、主に学校教育専攻が取り組むプロジェクト群と、教科教育専攻が取り組むカリキュラム開発プロジェクト群(PISA型および探究と体験型)があります。
- 大学院生は、基本的に自分の専門に近い領域のプロジェクトを履修し、教員と協働してプロジェクトを推進します。プロジェクトの調査や実践にかかわる部分については、教職大学院や附属学校等および地域の機関等と連携して行う場合もあります。
- 豊富な実践事例を組み込んだ包括的なカリキュラムまたは政策等の提案をまとめ、報告書を作成して公表します。

協働実践研究プロジェクトの構成
教育を支えるコミュニティを形成するために



知的基盤社会を生きるリテラシーを育てるために

教科教育専攻

21世紀の知的基盤社会に生きる力は、PISA(OECD生徒の学習到達度調査)のリテラシーに象徴されるような実践的探究的な学力であると考えられます。教科教育専攻では、教科専門の力を伸ばすとともに、リテラシーと人間力を育むためのカリキュラム開発を通じて、児童生徒の真の学力向上を支援できる教員の養成を目指します。

教科教育専攻の特徴

- 専門領域別教育研究と課題研究の履修および修士論文作成を通じて、教師に求められる高度な教科専門性と指導力を身につけます。
- 必修科目「協働実践研究プロジェクト(PISA型、探究と体験型カリキュラム開発)」では、大学院生と教員による2年間の協働研究を通じて、児童・生徒のリテラシー形成と人間力育成を支援するための教科横断的なカリキュラム開発と授業プランの検討を行います。
- 教育を深く考え、柔軟に発想する力を持ち、より高度な教科専門性と実践力を身につけ、教育現場での授業開発や協働研究において中心的な役割を果たし得る教員を養成します。

教科教育専攻の教育課程
(計30単位以上)

協働実践研究プロジェクト
知的基盤社会に生きるリテラシーを育てるカリキュラム開発

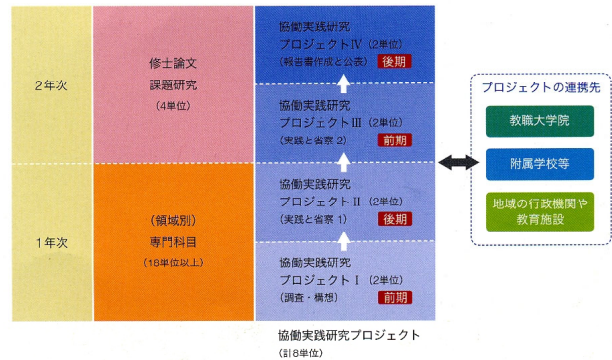
- PISA型
 - 探究と体験型
- (8単位)

領域別専門科目

- 教科教育研究
 - 教科に関する科目
- (計18単位以上)

課題研究(4単位)・修士論文

カリキュラム構成と履修形態の例



(福井大学大学院教育学研究科パンフレット)

別添資料 4-1：修士論文題目一覧（平成 16 年度～平成 19 年度）

平成 16 年度教育学研究科修士論文題目一覧

学位記号	専攻	専修	氏名	論文題目	指導教員	閲覧	複写	
399	学校教育	学校教育	石川 正吉郎	特別支援教育における養護学校のセンター的機能の進展に向けた実践研究	松木 健一	指導教員又は執筆者の許可を得る。	指導教員又は執筆者の許可を得る。	
400			梅田 多記恵	コミュニケーション教室における発達障害幼児の援助 -課題学習を通しての概念形成とコミュニケーションの関係について-	松木 健一	指導教員又は執筆者の許可を得る。	許可しない	
401			織田 恭直	「学力」・総合的な学習の時間、「道徳教育」における共通性・関連性を探る	寺岡 英男	可	可	
402			小池 悠輔	教員養成系学部におけるe-ポートフォリオシステムの構築	松木 健一	指導教員又は執筆者の許可を得る。	指導教員又は執筆者の許可を得る。	
403			西出 奈美子	精神疾患を抱える生徒とその家族に対する援助	松木 健一	指導教員又は執筆者の許可を得る。	許可しない	
404			山本 洋子	中学校における機能するコンサルテーションの研究 -心の教室相談員のグラウンドワークとしてのアプローチ-	松木 健一	指導教員又は執筆者の許可を得る。	許可しない	
405			向当 誠隆	協働の実践を省察、再構成する力を培う社会科	寺岡 英男	可	可	
406			牧田 秀昭	探究するコミュニティへのプロセス -数学科カリキュラム構成と全体研究運営をデザインする-	柳澤 昌一	可	可	
407			菅井 純子	学校性教育の限界と今後の展望 -「性」の健康教育の「可能性」を探る-	森 透	可	可	
408			障害児教育	障害児教育	伊藤 富貴子	新規教育支援教室の有効な運営と連携の一考察 (H町新規教育支援教室の実践から)	氏家 靖浩	許可しない
409	河合 君江	読み書きに困難を示す軽度発達障害児に対する作文指導			氏家 靖浩	許可しない	許可しない	
410	木村 徹男	進路選択における自己決定の研究 -親からの心理的影響との関連-			氏家 靖浩	許可しない	許可しない	
411	野尻 泰隆	高機能広汎性発達障害児の他者認知の特徴と療育支援			三橋 美典	可	可	
412	廣場 陽子	点字学習のレディネス期にいる視覚障害児との学習活動に関する事例研究			中村 圭佐	指導教員の許可を得る。	指導教員の許可を得る。	
413	菅原 伸康	反省的实践者としての「重い障害のある子どもの実践研究」のあり方			氏家 靖浩	許可しない	許可しない	
414	土崎 修	子ども・教師間における相互育ちを成立させるための実践の在り方について -自閉症と知的障害を併せ有する幼児とのかかわり合いから-			熊谷 高幸	可	可	
415	王 愛武	坂口安吾作品における女性像 -「白痴」・「青鬼の種を洗ひ女」などを中心として-			越野 格	可	可	
416	尾崎 比左恵	「伝え合う力」の育成とその評価の在り方			三好修一郎	可	可	
417	坂森 美奈	太宰治「人間失格」論			越野 格	可	可	
418	間 春彦	子どもを主体とした文学教材の授業づくり	三好修一郎	可	可			
419	・	「句題和歌」の和漢比較研究	澤崎 久和	可	可			
420	南部 美沙希	江戸後期の待遇表現 -「ませ」「まし」の使い分けをめぐって-	高山 善行	可	可			
421	李 杰	堀 辰雄とロマン	越野 格	可	可			
422	社会科教育	社会科教育	澤村 仁	シミュレーションを生かした中学校社会科授業の研究 -公民単元「市場のはたらき」の開発を通して	寺尾 健夫	可	可	
423			丹後 明史	子どもによる社会事象間の関係理解を促進する学習方法の研究 -ウェビング法とコンセプト・マッピングを手掛かりにして-	寺尾 健夫	可	本人の許可を得ること。	
424			長谷川 美穂	戦国大名朝倉氏の権力編成と所領安堵	松浦 義則	可	可	
425			劉 裕午	日本の生産システムの国際移転・中国の事例から	木村 亮	可	許可しない	
426	理科教育	理科教育	浅妻 正子	キク科アザミ属(<i>Cirsium</i>) 植物の形態的変異と細胞地理学的研究 -カガ/Aザミ(<i>C. kaqamontanum</i>) と類似種について-	横山 俊一	可	可	
427			西村 千穂	「エネルギー・環境教育」の目的の明確化に基づく教育システムの構築方法	伊佐 公男	可	可	
428	教科教育	音楽教育	上村 良光	個を育てる合唱活動の在り方についての一考察	橋本 龍雄	許可しない	許可しない	
429			本多 春奈	ヨハネス・ブラームスの古典性とロマン性 ピアノ・ソナタ第3番へ短調 作品5 の解釈を中心に	越野 正信	可	可	
430			吉ヶ谷麻衣子	童謡歌曲集「ぼしとたんぼ」の詩と音楽 -童謡詩人金子みすゞの詩の解釈を中心に-	松濱 敏郎	可	可	
431			吉川 将聖	シューベルトの連作歌曲集 「美しき水車小屋の娘 冬の旅」の比較研究	松濱 敏郎	可	可	
432			・治 千景	作 品：「かえられないもの」油彩画 S100号 関連論文：「幼児の身体と心情の描写表現」	大森 悟	可	可	
433			佐藤 恵理	作 品：「かわり02」アクリル画 F50号 関連論文：「人と人の関わりに着目した絵画表現」	大森 悟	可	可	
434			矢尾 美穂	作 品：「心内稀光」墨像 関連論文：「人間の内面と環境との相互関係をテーマにした制作」	楊 冬白	可	可	
435			保健体育	姜 成泰	戦前・戦後に於ける福井市のサッカーと晋州市のサッカーの始まりに関する比較研究	新井 博	可	可
436			福島 夕希子	顔面表情が発達の運動課題に及ぼす影響 -パフォーマンス(タイム)と心理特性(質問紙調査)の観点から-	清水 史郎	可	可	
437			技術教育	技術教育	足立 直樹	光ファイバーを利用した機械安全用非常停止・インターロックシステムの開発	上田 正紘	可
438	川畑 仁人	レーザー反射法と総和法による表面凹凸の高解像度測定法の開発			上田 正紘	可	可	
439	児玉 智史	自動車エンジンスタート検出装置の開発			上田 正紘	可	可	
440	舒	レーザー散乱光によるエナメル電線皮膜の架橋度測定法の開発			上田 正紘	可	可	
441	王 宗建	大型タンク底板欠陥計測法の開発	上田 正紘	可	可			
442	英語教育	英語教育	中村 珠美	Motivating Vocational High School Students through Dialogue Journals	大下 邦幸	可	可	
443			山下 由希子	J・M・バリとピーター・パン	木原 泰紀	可	可	

(外部評価のための資料 福井大学教育地域科学部・大学院教育学研究科の現状、平成 19 年)

平成17年度教育学研究科修士論文題目一覧

学位記番号	専攻	専修	氏名	論文題目	指導教員	閲覧	複写
444	学校教育	学校教育	酒井 郁美	学校教育と博物館 - その効果的連携方法の開発研究 -	宇野 文男	可	不可
445			佐野 こう	遊びを通じた子どもの居場所づくりの実践研究	森 透	可	可
446			反中 亜弓	子どものキレと怒りの表現に関する研究 - 対人場面を考慮した怒り表現尺度の作成を通して -	梅澤 章男	可	可
447			福岡 佳貴	ひきこもりを抱える家族への支援方法の検討 - ひきこもりの娘と一時不登校になった息子を抱える家族を通して -	松木 健一	閲覧室での閲覧のみ可	不可
448			山口 博功	精神病棟の入院患者に対するSocial Skills Trainingプログラムの開発	梅澤 章男	筆者の許可を得ること	不可
449			石田 圭二	ナラティブを用いた作業療法臨床実習の振り返り - 対象者中心の作業療法実践のために -	寺岡 英男	可	可
450			市波 和子	看護実践能力育成に関する実践研究 - 実習経験の省察を手がかりにして -	柳澤 昌一	可	可
451			木田 章	ST養成における実習教育を振り返ることで見えてきた「実践の中の知」	森 透	可	可
452			竹澤 勇	つながり合って育つ - 物語教材を使った授業で培われる学びの探究 -	森 透	登場する児童のプライバシー保護を遵守	守秘義務を要する教職員に限る
453			竹澤 宏保	理科学習における探究活動の構成と科学的リテラシー - 17年間の実践のあゆみをつかみ直し、これからの理科学習を展望する -	柳澤 昌一	可	可
454			田中 秀史	つながり合って育つ - 子ども達の学び合いを意識した主体的な学習の在り方を探る -	松木 健一	登場する児童の個人情報に留意すること	守秘義務を要する教職員に限る
455			與河 かおり	臨床実習で問題を抱える学生とそれを支える教師の役割	松木 健一	可	可
456			平馬 隆	一私立高等学校における教育相談的対応の実践史と今後の展望 - 教育相談活動の一層の充実に目指して -	松木 健一	論文作成者の同意	論文作成者の同意
457			小野 直樹	実践コミュニティとしての学校	柳澤 昌一	可	可
458			障害児教育	障害児教育	井町 小枝子	比喩理解の発達に関する生理心理学的研究 - フライミングパラダイムを用いた事象関連電位を中心に -	三橋 美典
459	音 有砂	特別支援教育の開始期における「交流教育」の在り方			熊谷 高幸	不可	不可
460	水島 早智子	病弱養護学校に在籍する心身症・精神疾患の診断をうけた生徒への教育支援			氏家 靖浩	不可	不可
461	小柏 博英	身体障害者の防災力を高めるための実践に関する研究 - 福井豪雨の教訓を絶やさないために -			氏家 靖浩	筆者の了解した場合のみ	不可
462	藤田 正一	対人援助者の今日的在り方に関する考察	氏家 靖浩	不可	不可		
463	国語教育	国語教育	高 〃	宮沢賢治作品における国際意識 - その「中国」観 -	越野 格	可	可
464			李 越	村上春樹論 - コミュニケーションの物語 -	越野 格	可	可
465	社会科教育	社会科教育	上原 章史	高速道路と地域の発展	月原 敬博	可	可
466			王 金枝	唐朝の学校制度と日本の古代学校制度との比較について	山根 清志	可	可
467			近 理子	構成主義に基づき(中学校社会科授業の開発 「モニタリング資料を活用した単元」福井の発展方法を探る。)の学習と評価 -	寺尾 健夫	可	可
468			太良 公男	米國戦略が規定した日米安保と日本の安全保障	横井 正信	可	可
469			田 敏功	四・五世紀における日本への大陸からの移民 古代東アジア世界の一体性の例証として	山根 清志	執筆者本人に連絡・確認	執筆者本人に連絡・確認
470	数学教育	数学教育	船本 裕之	コンピュータ等ITを活用した教材が学習意欲向上に与える効果	黒木 哲徳	引用する場合は学校名について配慮	引用する場合は学校名について配慮
471	理科教育	理科教育	石川 雄祐	加越台地の海成段丘と構造運動	山本 博文	可	可
472			土田 浩司	奥越地域の崩壊地形と断層運動について	山本 博文	可	可
473	音楽教育	音楽教育	岡部 友紀	別宮貞雄の歌曲における抒情的表現の研究 - 歌曲集「智恵子抄」を中心に -	松濱 敬博	可	可
474			前田 里子	ショパン作曲 24の前奏曲 作品28 における統一性と多様性についての一考察	高木 裕美	可	不可
475			相馬 理恵	作 品：「天使の食卓、工藝 関連論文：素材の質感を生かした家具制作	宮崎 光二	可	可
476	美術教育	美術教育	松本 和子	作 品：「共二折ル・まなざしの行方」彫刻 関連論文：人物をモチーフにした具象彫刻における「顔」について	楊 冬白	可	可
477			佐竹 由美子	生徒の実態に柔軟に対応できるカリキュラム作成のための授業の検討 - 中学校美術の授業実践を通して -	笠置 三郎	可	可
478	保健体育	保健体育	佐々木 善美	有酸素運動が高脂血症患者の血清脂質に及ぼす影響	戎 利光	可	可
479			野尻 奈央子	オープンウォーターのイメージ構築	清水 史郎	可	可
480			本 一之	児童の生活習慣と体力・身体組成との関連	戎 利光	可	可
481			宮本 祐治	クロール泳法における呼吸動作のラテラリティ	清水 史郎	可	可
482	技術教育	技術教育	野本 真弓	ファジシステムによる高速双胴船のローリングおよびピッチング制御に関する研究	上田 正紘	可	可
483			宮腰 陽文	ヒューマンインタラクションによる四脚ロボットの進化的行動獲得に関する研究	塚本 充	可	可
484			廣田 大輔	言葉を用いた三次元形状検索システムの構築に関する研究	塚本 充	可	可
485	家庭教育	家庭教育	大島 真理子	子どもの自尊感情を育む教育と家庭科	荒井 紀子	可	不可
486	英語教育	英語教育	谿 悠子	The Dead Zone の研究 - Stephen Kingと現代アメリカ	木原 泰紀	可	可
487			渡辺 典子	JAMES JOYCE'S 'DUBLINERS': ASPECTS OF "PARALYSIS" AND "EPIPHANY"	木原 泰紀	可	可

(外部評価のための資料 福井大学教育地域科学部・大学院教育学研究科の現状, 平成 19 年)

平成18年度教育学研究科修士論文題目一覧

学位記号	専攻	専修	氏名	論文題目	指導教員	閲覧	複写		
488	学校教育	学校教育	腰田 裕之	「いじめ」に関する社会的な背景の変化と中学校における取り組み	松木 健一	筆者の許可を得ること	不可		
489			齋藤 綾	探求的な授業づくりをめざす教師の協働研究の展開と実践認識の発展過程 実践記録の作成・再構成プロセスにおける実践認識の発展過程の跡づけを中心に	柳澤 昌一	可	可		
490			斎藤 弘子	「気がかりな子」への援助活動における学生ボランティアとの協働の可能性 -ライフパートナー事業に焦点をあてて-	松木 健一	筆者の許可を得ること	不可		
491			澤本 恵	科学的リテラシー形成を目指す探求型カリキュラムの構成と実践 -欧米の科学教育プログラムの視点から福井大学附属中学校の理科実践を分析する-	寺岡 英男	可	可		
492			鈴木 瑞穂	生活科における協働活動と実践コミュニティの発展に関する実践研究	松木 健一	可	不可		
493			田中 恵理子	小学校における特別支援教育の体制作りについて	松木 健一	不可	不可		
494			内藤 由佳	子どもの自己肯定感を育てるための調査的・実践的研究	大野木 裕明	可	第3章の子どもの写真は複写不可		
495			野路 拓史	長期にわたる探求的な学びの実践とコミュニティの展開についての省察的研究 -ふれあいフレンドクラブ5年間の歩みから紐解く-	森 透	可	筆者の許可を得ること		
496			田 典子	小・中学校におけるソーシャル・スキル・トレーニング実践の現状と課題	大野木 裕明	可	可		
497			宮川 誠	福井県立福井東養護学校の教育相談室等における生徒への支援方法の検討 -生徒の「語り」から自己を形成るかかわりを通して-	松木 健一	本人の許可を得ること -面談室内のみ可	不可		
498			土田 真理子	ポストモダンにおける青年期のアイデンティティ形成に関する一考察	長谷川 守男	可	筆者の許可を得ること		
499			板垣 英一	子どもの探求的学びの成長プロセスの省察的研究 -福井大学教育地域科学部附属小学校における授業実践から-	森 透	個人研究に利用する場合のみ可	個人研究に利用する場合のみ可		
500			学校教育	学校教育	及川 三枝子	精神看護学実習における学生の成長プロセスの省察的研究	森 透	可	筆者の許可を得ること
501	荻原 昭人	学校改革への挑戦 (マネジメントする立場から組織として生徒主体の学びをいかに創り上げていく。)			松木 健一	可	可		
502	坂田 薫	子ども・教師・保護者・地域における学びの実践研究 -学校づくりを考える-			森 透	筆者の許可を得ること	不可		
503	齋田 里美	学生の省察を支える終末期実習改革 -実習経験を通じた成長を学びがかりに-			森 透	可	筆者の許可を得ること		
504	島本 幸恵	授業と実習をつなげるための学びの構築 -「形式知」から「暗黙知」への学びを目指して-			寺岡 英男	可	筆者の許可を得ること		
505	清水 継子	個の歩みに即した実習経験の再構成 -急性期実習における看護実践能力の育成の検討-			柳澤 昌一	可	筆者の許可を得ること		
506	藤本 寛巳	学びの連続性が育んだ探究心 -従来の講義形式を見つめ直すことで見えてきたもの-			松木 健一	可	筆者の許可を得ること		
507	渡邊 輝美	省察的看護学実習と看護実践力の育成 -実習とその省察過程の再構成を中心に-			柳澤 昌一	可	可		
508	審判教育	審判教育			瀧波 慶和	治療が困難な病児(障害)を持つ患者、家族、それに関わる医療者に関する医療心理学的研究 -がんなどの終末期患者・発達障害児を例にして-	氏家 靖浩	不可	不可
509	国語教育	国語教育			于	「金閣寺」試論 -溝口と金閣(美)を中心に-	越野 裕	可	可
510			趙 曉	日中同形語についての対照研究 -「反対」「便宜」事情の場合-	高山 善行	可	可		
511			林 裕子	漢字作品(一点)、仮名作品(一点)、漢字仮名交じり作品(一点)及び作品の関連論文	法水 光雄	可	不可		
512			藤江 ゆかり	漢字作品(一点)、仮名作品(一点)、漢字仮名交じり作品(一点)、三作品についての解説	法水 光雄	可	可		
513	理科教育	理科教育	野村 麻衣	数学教育におけるPISA調査の追試による日本と中国の比較研究	黒木 哲徳	可	可		
514			宇野 章代	クロム()アミノ酸錯体の溶液内における熱および光異性化反応の研究	中田 隆二	可	可		
515			葛野 剛司	ジペプチドのプロトン親和力決定における構成成分アミノ酸の寄与	伊佐 公男	可	筆者の許可を得ること		
516			菅原 英淑	質量分析法によるスルホフタレイン系pH指示薬の溶液内平衡の観察	中田 隆二	可	可		
517			細谷 佳央里	雪を題材とした教材開発とリアルタイム教育モニタリング法の研究	香川喜一郎	可	可		
518			音楽教育	音楽教育	谷口 薫里	作曲「ピアノソナタ」 副論文「久石 譲とその音楽について」	島崎 篤子	可	不可
519					福塚 香織	ショパン作曲(練習曲集)作品10と作品25における技巧と音楽的表現の研究 -同時代の作曲家との関係を中心に-	高木 裕美	可	可
520					松川 佳子	歌詞の解釈に焦点をあてた歌唱指導に関する一考察	橋本 龍雄	可	筆者の許可を得ること
521			美術教育	美術教育	竹内 ちひろ	作品制作「工芸制作」わたる 関連論文「舟をテーマにした制作	宮崎 光二	可	可
522					中村 允也	作品制作「鉄による彫刻作品「精神のカタルシス」」 関連論文「素材と見せ方」鉄による彫刻作品-	宮崎 光二	可	可
523	文珠四郎悦子	障害をもった子どもへの美術教育に関する考察 -生き生きとした表現活動への支援・指導とは-			池内 慈朗	可	可		
524	横山 純子	低学年図画工作科における鑑賞活動の検討			笠置 三郎	可	可		
525	保健体育	保健体育	恵 敏	中国における近代スキーの誕生	新井 博	可	可		
526	保健体育	保健体育	瀬上 寛樹	遠投能力向上を目指した指導法の研究	吉澤 正尹	可	可		
527	技術教育	技術教育	陳 暈	光学的手法による油劣化診断法の開発	上田 正統	可	可		
528			鄭 金玲	e-Learningを指向した日本語学習支援システムの構築に関する研究	塚本 充	可	可		
529			西田 京平	Webで動作する制約条件を考慮した配置支援システム構築に関する研究	塚本 充	可	可		
530			馬 逸汀	ネットワークを用いた授業支援システムに関する研究	塚本 充	可	可		
531			李 毅	コンセント挿抜感触についての研究	上田 正統	可	可		
532			李 杰龍	決定木による感性データからのルール抽出に関する研究	塚本 充	可	可		
533			家政教育	家政教育	内田 舞	学校教育と生殖補助医療技術	竹内 恵子	不可	不可
534	英語教育	英語教育	趙 鴻	Word-formation in Contemporary English: Processes and Devices as Seen in Neologisms	中根 貞幸	可	可		
535			渡辺 真理	英文読解における意見・考えを求める発問の効果	大下 邦幸	可	可		
536			徳田 加奈	THE MONSTER AND THE SELF: A PSYCHOANALYTIC APPROACH TO MARY SHELLY'S FRANKENSTEIN	木原 泰紀	可	可		

平成19年度教育学研究科修士論文題目一覧

学位記番号	専攻	専修	氏名	論文題目	審査委員		
537	学校教育	学校教育	朝倉 恭子	気がかりな子どもを含む少人数学級集団作りの研究	主査 松木 健一 副査 廣澤 透		
538			佐々木 菜央	不登校の児童・生徒に対するチーム援助の実践研究 ～チーム援助に大学生はどのようにかかわることができるのか～	主査 森岡 透 副査 柳澤 昌一		
539			車 冬梅	教員養成改革の日中比較研究 両国の教員養成カリキュラムを中心に	主査 森岡 透 副査 柳澤 昌一		
540			別司 佑輔	長期にわたる探求的な造形活動の省察的実践研究 ～福井大学附属小学校における低学年造形教育の実践を読み解き約2年間にわたる実践を通じた子どもたちの学びのプロセスを分析・再構成する～	主査 森岡 透 副査 柳澤 昌一		
541			永田 賀保	知識基盤社会に必要な生きる力を培うための社会科教育のあり方 ～福井大学教育地域科学部附属中学校における授業実践から～	主査 柳澤 昌一 副査 森岡 透		
542			藤井 千代美	探求するコミュニティの発展過程を支える授業デザイン ～看護教育における授業実践から3段階の「表現」の場へのプロセス～	主査 柳澤 昌一 副査 森岡 透		
543			藤下 ゆり子	住民主体の地域医療システムの構築 ～看護職(保健師)としての50年の活動を振り返り看護教育を捉え直す～	主査 森岡 透 副査 柳澤 昌一		
544			藤本 裕子	つながり合って育つ ～私の中での「つながり合って育つ」の誕生と成長や、協働で物語を読む授業の変遷を、語り直す～	主査 森岡 透 副査 柳澤 昌一		
545			障害児教育	障害児教育	伊藤 こず恵	感覚の過敏性を持つ一自閉症児の7年間の療育経過	主査 熊谷 高幸 副査 松木 健一
546					内海 佑子	地域の小学校に通学する視覚障害児の言語概念の形成に関する事例研究	主査 松木 健一 副査 中村 保和
547	島田 郁子	コミュニケーションにおける中心的なモダリティの違いによる影響について ～聴覚障害児・者のコミュニケーションから～			主査 松木 健一 副査 三橋 美典		
548	竹田 亜矢	特別支援学校に在籍する生徒の行動調整と授業に関する一考察			主査 松木 健一 副査 石井N-077麻子		
549	乗京 麻実	特別な教育的支援を必要とする児童とその児童を取り巻く人の関係形成についての事例研究			主査 松木 健一 副査 廣澤 透		
550	堀田 翼	社会復帰のためのフリースペースにおけるひきこもり青年と臨床実習生との関係構築についての 一考察			主査 三橋 美典 副査 松木 健一		
551	松田 慶子	自閉症児の課題遂行時における支援者とのやりとり・二事例についての分析			主査 熊谷 高幸 副査 松木 健一		
552	山 俊一	特別支援学校における職業教育と卒業後の支援に関する研究			主査 熊谷 高幸 副査 松木 健一		
553	国語教育	国語教育	潘 娜	吉本ばなな初期作品論 - 「小道具」を視点として -	主査 越野 格 副査 龍吹 寛		
554			呂 俐俐	谷崎潤一郎研究 - 「西洋」を視点として -	主査 越野 格 副査 龍吹 寛		
555			笠原 宏太	戦国大名朝倉氏領国下における農民支配	主査 松浦 義則 副査 山根 清志		
556	数学教育	数学教育	長田 剛裕	数学的リテラシーの育成をめざす活動のある授業について	主査 黒木 哲徳 副査 佐分利 豊男 杉谷 貞三 伊禮 三之		
557			田中 裕人	PISA調査からみた算数・数学の教科書の調査研究 ～PISA型の数学的リテラシー向上を目指す授業改善のために～	主査 黒木 哲徳 副査 佐分利 豊男 杉谷 貞三 伊禮 三之		
558			安居 幸恵	自ら数学する生徒の育成を目指して	主査 黒木 哲徳 副査 佐分利 豊男 杉谷 貞三 伊禮 三之		
559			理科教育	理科教育	金谷 佳美	モリブデンブルー法における還元型モリブドリン酸錯体の生成挙動の研究	主査 中田 隆二 副査 浅原 雅浩
560	美術教育	美術教育	川崎 耕介	エネルギー環境問題に対する子ども達の実態とそれに応じた「かがく絵本」の有効性	主査 伊佐 公男 副査 石井 恭子		
561			山口 奈津紀	小学校の振り子実験における体積を一定にした実験装置の提案	主査 伊佐 公男 副査 石井 恭子		
562			稲葉 寛乃	作品「世界はますます見えなくなった」関連論文「視覚と曖昧さについての検証」	主査 西畑 敬秀 副査 湊 七雄		
563	教科教育	保健体育	朝倉 俊輔	木水育男の「わが家の玄関に子どもの絵を!!!」の運動についての考察	主査 笠置 三郎 副査 池内 慈朗		
564			奥村 浩司	中高年齢者における100m走疾走能力の加齢にともなう変化	主査 田中 秀一 副査 清水 史郎		
565			窪田 範子	走り高跳びにおけるはさみ跳びから背面跳びへの円滑な移行法	主査 田中 秀一 副査 清水 史郎		
566			小池 康一郎	福井県の高等学校における体操競技の衰退について ～昭和43年福井国体開催から現在まで～	主査 清水 史郎 副査 田中 秀一		
567			中篤 早百合	剣道競技における不合理的思考の因子構造 -高校生が団体戦において実力上位者と対戦する場合-	主査 清水 史郎 副査 田中 秀一		
568			村田 寛忠	競泳セルフ・エフィカシー尺度の開発 -因子抽出および信頼性の検証-	主査 清水 史郎 副査 田中 秀一		
569			技術教育	技術教育	袁 丹	対話型遺伝的アルゴリズムによる配色デザイン支援システムに関する研究	主査 塚本 充 副査 上田 正統 井上 博行
570					郭 玲玲	ペット型ロボットの動作に対する感性分析に関する研究	主査 塚本 充 副査 上田 正統 井上 博行
571	片山 治章	ネットワークを用いた協調型3Dオブジェクト作成システムの構築に関する研究			主査 塚本 充 副査 上田 正統 井上 博行		
572	高 一	表面変位測定用ハイブリッド光学系の同軸化に関する研究			主査 塚本 充 副査 上田 正統 井上 博行		
573	張 磊	Web上で動作する庭園作成支援システムの構築に関する研究			主査 塚本 充 副査 上田 正統 井上 博行		
574	英語教育	英語教育	川北 さと美	An Empirical Study on the Effectiveness of Teacher Feedback and Peer Feedback on Student Writing	主査 大下 邦幸 副査 伊達 正起		
575			施 凱盛	The Effectiveness of Dictogloss in Improving Listening Comprehension Ability	主査 大下 邦幸 副査 伊達 正起		
576			樊 景麗	Effectiveness of Instructing Learners about Recasts to Enhance Noticing	主査 大下 邦幸 副査 伊達 正起		
577			MOSTAFA MASSRURA	An Internet-based and Corpus-driven Study of English: New words, Collocations, and Idioms	主査 中根 貴幸 副査 緒 清隆		
578			吉田 三郎	「名セリフ」の使用が英語学習に与える効果	主査 大下 邦幸 副査 伊達 正起		

(基礎資料)